

田野平遺跡

1984・3

大和村教育委員会

卷頭図版 滅施遺景



序

大和村は、古くは日川を挟む右岸の初鹿野、鶴瀬、左岸の木駄、田野、日影の5ヶ村でありましたが、昭和16年2月11日合併して大和村となり、東西約10km、南北約4kmにわたって集落が点在している農山村であります。

山間の台地は、程よい勾配で陽を十分にだき、近くには沢をかかえた恵まれた環境にあり、早くから拓けて来たであろうことが、村内の遺物埋蔵地等を通して推測できます。

遠い昔からこの地に移り住み、文化の種を育み続けて来た先人のあることを思う時、私たちは、当時の生活を偲び、人々として築きあげて来たかけがえのない文化遺産をたずね、懇示し、子々孫々に伝えて、豊かな「ふるさとづくり」に資することが、責務であると考えます。

今回の発掘調査は、多目的研修集会施設建設に伴う記録保存を目的としたものであり、県文化課のご指導と、日本大学文理学部史学研究室のご協力によってその目的を達成できたことは、喜ばしい限りであります。

遺跡からは、第1号～第4号までの竪穴式住居址が検出されました。第3号住居址は、一部が消失しており、時期の認定は困難ですが、他は出土土器から平安時代末葉頃と推定でき、また、多数発見されました土壙群は绳文式時代早期から平安時代末葉にかけてのものであります。そのうち、主体となるのは平安時代末葉のものであります。すなわち、本土壙群は竪穴式住居址とはほぼ同時期の遺構であると推察されます。

また、遺構の検出状況から、現在の県立徳院の境内あたりまで住居址群が存在していたであろうことが推察されます。

本遺跡は、周辺の久保貝田を含む地域の一地点と推定できますが、恐らく周辺地域にも竪穴式住居址群が存在する可能性が強くなったと考えられます。

本遺跡の発見は、私たちの住む大和村の古代史へ満りと誠を与えるものであり、さらに、今後発見されると思われる先人の残した遺跡に対する大いなる期待と限りない想像を盛りあげ、古代史探求の端緒を開いた貴重な資料といえます。

最後に、試掘の時から懇切な指導助言をいただきました県文化課の木本健氏はじめ、発掘調査の作業に直接あたらされました日本大学の竹石健二氏・野中和夫氏・澤田大太郎氏の方々、更には、この調査にあたって深いご理解と、ご協力を賜わりました多くの関係各位に、心から感謝申し上げると共に、本報告書が、埋蔵文化財に対する一層の理解を深め、広く地域づくりのために活用されることを念願して、挨拶といたします。

昭和59年3月

大和村教育委員会

教育長 野 澤 實 一

例　　言

1. 本書は、山梨県東山梨郡大和田野平遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡名は、小字名をとり「田野平遺跡」とした。
3. 発掘主体者は大和村教育委員会である。
4. 本遺跡の発掘調査は、大和村による多目的研修会場の建設に伴なう緊急調査として、大和村教育委員会の委託を受けた田野平遺跡発掘調査団(担当・野中和夫)が行ったものである。
5. 発掘調査は、試掘調査・本格調査の二回にわたり実施し、このうち試掘調査は、山梨県教育委員会文化課指導のもと大和村教育委員会が行い、本格調査は、田野平遺跡発掘調査団が行ったものである。
調査期間は以下のとおりである。
試掘調査 昭和58年 6月20・21日
木格調査 昭和58年 7月23日～昭和58年 8月22日
6. 各遺構に命名した番号は、遺構の確認ごとに順次つけたものであり、このうち土壌には、平面形が矩形を呈するものを第1・2・3～40号土壌と、円形を呈するものを第50・51～58号土壌と呼称した。
7. 各遺構の遺物散布図に用いたトーンは次のとおりである。
● 踏　　▲ 十器　　■ 剥片
8. 本書では、各項目・各遺構ごとの文末に記載者をそれぞれ明記し、その責任を明確にした。
9. 石器の石質鑑定は、日本大学助教授・小坂和夫氏、日本大学助手・磯部邦昭氏、日本大学文理学部応用地学科の諸氏によるものである。
10. 本書の編集は、竹石・澤田・野中が行った。
11. 発掘調査および報告書作成にあたり、次の方々に多大なる御助言・御協力を賜わった。記して謝意を表する次第である。(順不同)
末木 健氏(山梨県教育委員会文化課)・小野正文氏(山梨県立考古博物館)
岩崎卓也氏(筑波大学助教授)・山内昭二氏(日本大学三島高等学校教諭)
村田文夫氏(川崎市教育委員会)・山路恭之助氏(須玉町教育委員会嘱託)
鈴木敏中氏(三島市教育委員会)・土屋政司氏(大和小学校教諭)
米山薦應氏(景德院住職)
平山袈裟典氏・富山兼八氏・小林敦則氏・野中久子氏(以上大和村)

調査団の組織

試 据 調 査

指 導 末木 健（山梨県教育委員会文化課）
小野 正文（山梨県立考古博物館）
担 当 者 横倉 雅幸（国学院大学文学研究科特別研究生・考古学研究室）
補 助 員 米山 茂應（姫徳院住職）・富山 葦八
作 業 員 雨宮 真・塩野 仁視・佐藤 俊彦・富山 隆政・
平山 桂二（以上 雨宮土木）

本 格 調 査

團 長 竹石 健二（日本大学助教授）
副團長 澤田 大多郎（日本大学講師）
調査主任 野中 和夫（日本大学助手）
調査員 加藤 武美（千葉経済高校職員）・田中 次郎（愛国学園教諭）・
野崎 欽五（日本大学副手）
調査補助員 嵐山 修・金子 佳史・峰沢 巧輝・和氣 節子・名取由美子・香取 治道・
竹場 真司・富沢 邦浩・宇津江弘道・渡辺 政治・辻 涼樹・戸田 史・
山田 仁和・坂從 貴子（以上 日本大学先史学研究会会員）・小林 茂夫（日
本大学）
參 加 者 手塚 浩司・三枝 敬和・古尾 勇二・平山 英美・萩原 正人・寺沢 直美・
石田 智子・古屋真由美・藤田 泰子・川本 美香・佐藤 美佳・佐藤 銑・
平山 邦人・木下いずみ（以上 大和中学校郷土研究部部員）

遺 物 整 理

竹石 健二・澤田大多郎・野中 和夫・野崎 欽五・嵐山 修・平野 修・
岩本 敦之・和氣 節子

事 務 局

大和村教育長 野澤 實一

教育委員会 太田 隆夫・寺沢喜美雄・天野 昌明・佐藤 正・荒井 セン・岸本ゆり子

調査協力者

大和村文化財審議会

会長 平山 三郎

委員 石田 一夫・石川 梅鶯・小林 多祿・佐藤 忠次

目 次

序	大和村教育委員会教育長 野澤寅一
例 言	
調査団の組織	
第1章 調査の契機と経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 遺跡の位置と地理的環境	2
第2節 考古学的環境	2
第3章 調査の方法と概要	5
第4章 層 序	8
第5章 先土器時代の遺物	9
第1節 ローム層中（B区）出土の遺物	9
第2節 耕作土中出土の遺物	10
第6章 繩文式時代の遺構と遺物	10
第1節 土 墓	10
第2節 小堅穴	13
第3節 遺構外出土の遺物	14
第7章 平安時代の遺構と遺物	21
第1節 堅穴住居址	21
第2節 土 墓	34
第3節 集石土壙	52
第4節 配石遺構	52
第8章 近世以降の遺構	54
第1節 土 墓	54
第9章 結語 一調査の成果と課題	56
第1節 先土器時代	56
第2節 繩文式時代	56
第3節 平安時代	56
第4節 近世以降	60

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺遺跡	4
第2図	試掘調査範囲図	5
第3図	造構配置図	7
第4図	土層断面図	8
第5図	先土器（B区）遺物散布図及び土層断面図	9
第6図	先土器時代石器実測図（1～8）	11
第7図	縄文式時代土壙（第32・33号土壙）平面図及び土層断面図	12
第8図	遺構内出土土器（1～7）	13
第9図	第1号小窓穴平面図及び土層断面図	14
第10図	第1号小窓穴出土石器実測図	15
第11図	造構外出土土器—その1—（1～34）	16
第12図	造構外出土土器—その2—（35～71）	18
第13図	造構外出土土器—その3—（72～80）	19
第14図	遺構外出土石器—その1—（1・2）	20
第15図	造構外出土石器—その2—（3～7）	20
第16図	第1号住居址平面図及び土層断面図	22
第17図	第1号住居址カマド平面図及び土層断面図	22
第18図	第1号住居址出土遺物—その1—（1～11）	24
第19図	第1号住居址出土遺物—その2—（12～14）	25
第20図	第2号住居址平面図及び土層断面図	27
第21図	第2号住居址カマド平面図及び土層断面図	27
第22図	第2号住居址出土遺物（1・2）	28
第23図	第4-A・B号住居址平面図及び土層断面図	30
第24図	第4-A・B号住居址カマド平面図及び土層断面図	30
第25図	第4-A・B号住居址出土遺物—その1—（1～7）	32
第26図	第4-A・B号住居址出土遺物—その2—（8～14）	33
第27図	形態分類別にみた土壤の分布	36
第28図	第1・2・4号土壤平面図・断面図及び土層断面図	42
第29図	第13・14・15号土壤平面図及び土層断面図	43
第30図	第24・28・29・30・34号土壤平面図及び土層断面図	44
第31図	第25・27・38・39・41・56号土壤平面図・断面図及び土層断面図	45
第32図	第17・20・23・37号土壤平面図及び土層断面図	46
第33図	第3・35・36・57号土壤平面図及び土層断面図	47
第34図	第19・21・22・56号土壤平面図及び土層断面図	48
第35図	第5・6・18号土壤平面図及び土層断面図	49
第36図	第7・8・9・10・11・12号土壤平面図・断面図及び土層断面図	50
第37図	第51・52・53・54号土壤平面図及び土層断面図	51
第38図	第1号配石造構、第1・2号集石土壤平面図及び土層断面図	53
第39図	第16・26・31号土壤平面図及び土層断面図	55

図版目次

図版 1	1. 遺跡北側より天童山を望む.....	63
	2. 調査開始時の遺跡近景	
図版 2	1. 調査地内北側 造構完掘状況.....	64
	2. 調査地内南側 造構完掘状況	
図版 3	1. 先土器 B 区土層断面及び剝片出土状況.....	65
	2. 先土器 B 区剝片出土状況	
図版 4	1. 第 1 号小窓穴遺物出土状況.....	66
	2. 楩文式時代の石器	
	3. 純文式時代土塙（第32号土塙）完掘状況	
図版 5	1. 造構外出土繩文式土器—その 1 —.....	67
図版 6	1. 造構外出土繩文式土器—その 2 —.....	68
図版 7	1. 造構外出土繩文式土器—その 3 —.....	69
	2. 造構内出土繩文式土器	
図版 8	1. 第 1 号住居址完掘状況.....	70
	2. 第 1 号住居址カマド完掘状況	
図版 9	1. 第 1 号住居址出土遺物—その 1 —.....	71
図版 10	1. 第 1 号住居址出土遺物—その 2 —.....	72
	2. 第 2 号住居址完掘状況	
図版 11	1. 第 2 号住居址カマド完掘状況.....	73
	2. 第 2 号住居址出土遺物	
図版 12	1. 第 4-A・B 号住居址完掘状況.....	74
	2. 第 4-A・B 号住居址完掘状況	
図版 13	1. 第 4-A・B 号住居址出土遺物—その 1 —.....	75
図版 14	1. 第 4-A・B 号住居址出土遺物—その 2 —.....	76
図版 15	1. 調査地内北西側 造構完掘状況.....	77
	2. 調査地内北東側 土塙完掘状況	
図版 16	1. 第 5・6・7・8・9・10・11・12 号土塙完掘状況.....	78
	2. 第 7・8・9・10・11・12 号土塙土層断面	
図版 17	1. 第 1 号土塙完掘状況.....	79
	2. 第 3 号土塙完掘状況	
	3. 第 2・4 号土塙完掘状況	
図版 18	1. 第 28 号土塙完掘状況.....	80
	2. 第 17 号土塙完掘状況	
	3. 第 20・37 号土塙完掘状況	
図版 19	1. 第 13 号土塙完掘状況.....	81
	2. 第 14・15 号土塙完掘状況	
	3. 第 17 号土塙土層断面	

図版20	1. 第24・28・30・34号土塹完掘状況.....	82
	2. 第13・24・28・30・34・35号土塹完掘状況及び土層断面	
図版21	1. 第19・21・25・27・38・56号土塹完掘状況.....	83
	2. 第19・25・27・38・39・56号土塹完掘状況及び土層断面	
図版22	1. 第3・36・40・57号土塹完掘状況及び第57号土塹土層断面.....	84
	2. 第52号土塹完掘状況	
	3. 第51号土塹完掘状況	
図版23	1. 調査風景（1）.....	85
	2. 調査風景（2）	
	3. 調査風景（3）	
図版24	1. 通跡見学会風景.....	86
	2. 村長・教官長視察風景	
	3. 調査風景（4）	

表 目 次

表1	平安時代土塙一覧表（折り込み表）	
表2	形態分類別にみた土塙一覧表.....	35
表3	確認面における土塙の規模.....	37
表4	縦底における土塙の規模.....	38
表5	矩形土塙における方位と規模（長径）.....	39
表6	土塙内出土遺物伴出状況.....	40
表7	器種別にみた伴山遺物.....	40

第1章 調査の契機と経過

大和村では、健康で明るい文化生活の営み得る地域社会をつくるため、道路の整備・農林業経営の近代化・社会教育施設及び生活環境施設の整備拡充を進めています。

村の長期計画及び農村地域農業構造改善事業計画の中なかで、日川渓谷にレジャーセンターがつくられ、キャンプ場・テニス場・つり堀施設・緑の村会館等が建設されました。

今年度はさらにこの農村地域農業構造改善事業の一環として、村民の体力づくり及び地域の発展をはかるため、多目的研修集会施設の建設が計画され、田野地域内天童山景徳院の隣接地に土地所有者の協力を得て敷地が決まりました。

予定地内の埋蔵文化財については、先に県教育委員会の手による現地踏査が実施され、畠地内一面に縄文式土器、土師器を主体とする土器片が散布していることがわかり、土器片の表面採集がなされました。

この現地調査に基づき、山梨県教育委員会と大和村教育委員会のたび重なる協議により、まず事前調査を実施することになり、県文化課の指導応援を受け試掘調査が昭和58年6月20・21日に実施されました。

試掘調査の結果、6本設定したトレンチのうち、2木のトレンチ内より溝状の落込みが検出され、また、別のトレンチ内から住居跡のカマドと推定されるものが発見され、各所より土器の破片が多数検出されました。

この試掘調査の結果により、緊急に発掘調査をして、記録保存をする必要に迫られました。幸い、この方針は村長、村議会、文化財審議会の深い理解により本格調査が決定され、発掘調査経費を6月議会に緊急に計上することができ、調査主体は大和村教育委員会がこれにあたり、遺跡名は小字名をとって、田野平遺跡とすることになりました。

以後、文化財保護法にもとづき、埋蔵文化財発掘届関係の諸手続きを文化庁にする一方、日本大学文理学部史学研究室に発掘調査を依頼し、6月28日、7月6日の二度にわたる大学の現地事前調査により発掘の計画がたてられ、日本大学史学科教員の竹石健二・野中和夫・澤田大多郎の諸氏をはじめとする日本大学卒業生・日本大学学生及び大和中学校郷土研究部員などの協力により、7月23日より調査を開始し8月22日まで、丁度1ヶ月間にわたる発掘調査が連日、炎天下に続けられ、後記のような多くの成果をあげ、調査はここに無事終了しました。

(天野 昌明)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

田野平遺跡の立地する大和村は、甲府盆地の最東端部にあり、東は南大菩薩連嶺並びに笛子山系を境として大月市と、西は勝沼町、南（南西）は京戸山によって一宮町、北は大菩薩峠山麓を境として塩山市とそれぞれ接しており、周囲を、いずれも標高約1200～2000mの山々に囲まれた、文字通り山岳地帯の一翼を担う山梨県の東部に位置している。

この大和村には、村の中央部を富士川水系の支流・日川が北東から西へと注ぎ、この日川によって数多くの沢が形成されている。そのため、とりわけ風光明媚な地勢が造り出され、村の北東部・日川の上流には“竜門峠”と呼称される景勝の地が存在している。その反面、平坦地はほとんど皆無に等しく、僅かに沢・河川の流域、および山裾に微傾斜地が存在するのみで、今日、ここは居住地・耕作地として利用されている。

このような地勢の中にあって、田野平遺跡は、日川の左岸、曲り沢川と兩沢川とに挟まれた山裾の西側をのぞむ微傾斜地、標高約750mの地点に位置しており、行政区画では、山梨県東山梨郡人和村田野397-1に所在する。

遺跡は、武田勝頼の菩提寺として名高い天童山景徳院と隣接しており、調査以前は、ジャガイモ栽培、あるいは梅・桃・梨の果樹園として利用されており、かつては水稻栽培も行われていた地である。

第2節 考古学的環境

大和村は、前章で述べたように、甲府盆地とは日川の流域沿いに接するのみで、四方を険しい山々に囲まれて複雑な地貌を呈している。

この複雑な地勢が幸いして、とりわけ森林資源並びに水質資源には恵まれ、そのため今日でも数多くの動植物を目撲することができる。例えば、キジ・ヤマバトなどの野鳥類、ウサギ・イタチ・リス・イノシシなどの動物類、ヤマメ・ハヤなどの淡水魚、キノコ・ワラビ・ゼンマイ・タラ・ヤマブドウなどの採集植物等々がある。この豊富な資源から推察して、おそらく、遠い石器時代の頃から当地は狩猟・採集には事欠かず、人々の生活の舞台となっていたであろうことは容易に想像されるところである。

ちなみに、山梨県教育委員会の踏査によれば、昭和47年現在で村内には縄文式時代の遺跡を中心として4箇所の遺跡が確認されている。(註1) このうち、田野平遺跡の北側には、日川の支流の一つである曲り沢川の右岸には諸葛式土器片の散布する縄文式時代前期後半に比定される下久保具田遺跡（第1図・3）が存在し、他方、左岸には三戸式、勝坂・加曾利E式の縄文式時代早期並びに中期に比定される土器片、さらには歴史時代（平安時代）に比定される甕の破片が散布す

る山口遺跡（第1図・2）が存在している。（a2）また、田野平遺跡の西側約2kmには、日川の支流である小路沢川と笛子沢川とに挟まれた北西に面する微傾斜地上には、東に縄文式時代中期に比定される土器片の散布地および歴史時代の所産と考えられる地下式横穴墓の検出された日影遺跡（第1図・4）が存在しており、北に縄文式時代中期初頭の土器片が散布する包蔵地が存在している。このほか村内には、日川の上流、標高約1000mを測る天目地区からも縄文式土器片が採集されており（a3），さらには日川の支流・白蛇沢川の右岸、占部地区の南斜面上からは赤土（ローム層）中から出土したという石器・焼石が発見されている。

今後、地域住民による埋蔵文化財に対する関心の向上とともに、益々、遺物の散布地の発見、ひいては遺跡の検出例が増大することは疑いの余地がないところである。

（野中 和夫）

註

1. 川崎昌宏・塙島由喜男「山梨県・埋蔵文化財包蔵地調査カード」1972年
2. 現在、大和村教育委員会の依頼により、遺物は日本大学文理学部史学研究室内に保管されており、近い将来、何らかの形で資料を公表する予定である。この山口遺跡からは、縄文式時代早期に比定される沈線文土器、同・中期の土器片が豊富に出土しており、さらに興味深いのは、歴史時代（国分寺）の土師器とともに同時代の所産と考えられる手捏ねの水鳥をかたどった小形土製品が含まれていることである。
3. 大和小学校教諭土屋政司氏の御教授による。



第1図 道筋の位置と周辺地勢

第3章 調査の方法と概要

田野平遺跡の発掘調査は、大和村による多目的研修会場建設に伴なう事前調査として、二度にわたり実施されたものである。第一次調査は、昭和58年6月20・21日の両日にかけて遺構の存否の確認を目的として行い、第二次調査は、その結果にもとづいて本格調査として昭和58年7月23日から同年8月22日までの30日間を費やして行われたものである。

2回にわたる調査は、村の公共事業として緊急を要し、また、種々の事情から調査組織は各々異なり、第一次調査は、山梨県教育委員会文化課の指導のもとに横倉雅幸氏（国学院大学特別研究生）が行い、第二次調査は、田野平遺跡発掘調査団（団長・日本大学助教授 竹石健二、副団長・日本大学講師 澤田大多郎、担当・日本大学助手 野中和夫）が行ったものである。

第一次調査（試掘調査）は、開発予定地内のうち、おむね東側半分には、当時、農作物が栽培されていたことから、一部試掘ピット（1.3m四方、第4トレンチ）を設定し、土壤の堆積状況等を検索するにとどめ、遺構の探索は、主として西側であったことにした。この西側の調査には、南西から北東方向に幅1.2～1.8m、長さ5.5～10.5mのトレンチ3本（北から第1・5・3トレンチ）とこれに直交するように南東から北西方向に幅2.0m、長さ10.5mのトレンチ1本（第2トレンチ）をそれぞれ設定して、これにのぞんだ。



第2図 試掘調査範囲図

その結果、当地内における土層の堆積状態は、北側では、後世による搅乱が激しく現表土下約30~40cmでローム層・花崗岩が露出するのに対して、南側では、現表土下に黒色土（戦後水稻栽培を行なうために行ったという客土）、さらに、その下に暗褐色土・黒褐色土の遺物包含層、そしてローム漸移層・ローム土の順で移行しており、遺存状況の良好な南東端部では現表土下からローム層に至るまで約130cmを計測した。以上のことから、当地内における地形は、かつて遺構が存在した当時と現況とでは若干異なり、現況よりも南東側の方がより低かったことが明らかとなり、同時に、堆積土層から南東側にいくに従って遺存状況も良好であることが判明した。

つぎに、各トレンチで確認された遺構及び遺物は以下のとおりである。

第5トレンチ東側からは、ローム層上において平面形が矩形を呈すると思われる遺構の南東隅（のちの第11・12号土壇）を、第2トレンチ南側からは、黒褐色土上面において焼土、焼石および粘土粒子を伴う平面形が矩形を呈する堅穴住居址（のちの第1号住居址）をそれぞれ確認することができた。他方、これ以外のトレンチからは、明確な遺構は確認されず、遺物として土師器・灰釉陶器の細片が十数点、縄文式土器片が数点検出されたのみである。

以上、試掘調査で得られた成果にもとづいて、本格調査では、土層図を作成したのち排土の関係から開発地内をおよそ二分し、西側より順次調査を実施し、最終的に全面調査を行ったものである。このうち土層図は、遺跡地内における土層の堆積状況ならびに各時代の生活面を探求することを目的として作成した。これには試掘調査で設定したトレンチを利用して、さらに、それらを延長することによって、総数5木を作図した。5木の土層図のうち2木は、調査地内の長径（北西—南東）方向に、3木は、短径（北東—南西）方向に各々とり、そのうち前者は、1木は調査地内のおよそ中央部、第2トレンチ・第3トレンチの北壁を利用してこれを延長して作図し、他の1木は、第4トレンチ北壁を利用して前述のラインと平行に延長して作図した。後者の3木は、第1・5・3トレンチの各壁を利用してこれを延長して作図した。そして、各土層ラインの名前は、上述したものと順次A・B～Eラインと呼称することとした。その結果、Aラインでは、試掘調査で確認された第5トレンチ内の落ち込みは、当初予想された堅穴住居址ではなく、複数の土壇による重複であることが判明し、さらに第3トレンチ内南東隅から東側にかけて新たに堅穴住居址が検出されるに至った。同時に、堅穴住居址は、第3層の暗褐色土層中を切り込んで構築していることも判明した。この上層図作成における最大の成果は、Bラインにおいて、主として北西側半分の区域（ライン上）に集中して土壇群が存在することがわかり、同時に、これらの土壇群は、堅穴住居址と同様に、第3層の暗褐色土層中を切り込んで構築されていることが明らかになったことである。

換言するならば第3層は歴史時代の生活面であり、同時に、本地域内全域に同時代の遺構が存在していることが判明した。

従って調査は、全域にわたり行うことになり、前述のごとく本地域内東側における土壤の堆積がきわめて厚いために排土の関係から、一度に全域を調査することは不可能であり、最初に西側

半分を行い、その後に東側半分を行うことにした。

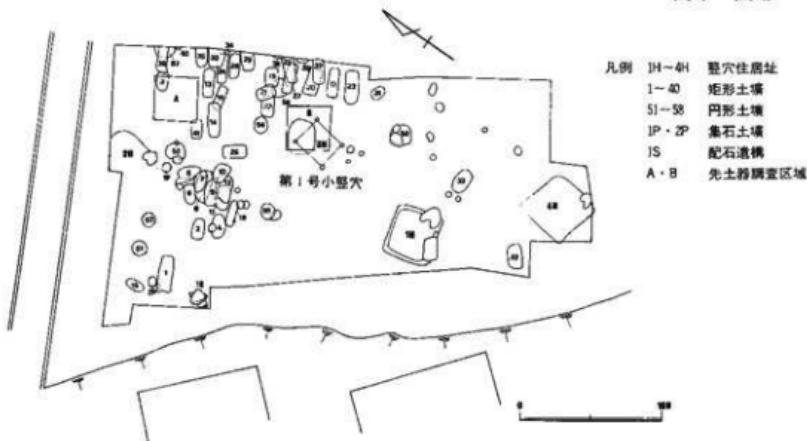
また、遺構の調査にあたっては、原則的に「十」字形に土層をとることで遺構の埋没状態をとらえるよう努めた。なお、検出された遺構には逐次名称を与え、竪穴住居址には第1・2～4号住居址と、土壙には平面形態から矩形と円形とに大別し、そのうち前者は第1号土壙に始まり以下第2・3～9号土壙と、後者は第50号土壙に始まり以下第51・52～58号土壙と呼称することとした。

調査の結果、調査区域内からは、歴史時代に比定される竪穴住居址4軒、土壙41基（矩形を呈するもの35基、円形を呈するもの6基）、集石土壙2基、配石遺構1ヶ所、縄文式時代に比定される小竪穴1ヶ所、同・土壙7基が検出された。

さらに、調査区域内の北東部に位置する土壙・小竪穴を調査中に、それらの擾土中から先土器時代の所産と思われる石の剝片が検出され、同時に遺構の光撮写真を撮影するためにその周辺部のローム層、ローム漸移層を精査していたところ同様の剝片が数点検出された。そこで、急遽、この場所に3m四方のグリッドを二ヶ所設定し、そのうちの西側をA区と東側をB区と呼称して調査にあたった。その結果、B区のソフトローム層中から、前述した遺構内およびその周辺部から検出されたものと同質の石の剝片が二点検出されるにおよび、先土器時代の遺物が存在することが明らかとなった。

なお、今回の調査では、日数・費用等の関係で先土器時代の遺構・遺物に関しては必ずしも十分なる調査はでき得なかったが、それについてはつぎの機会にゆだねることにした。

（野中 和夫）

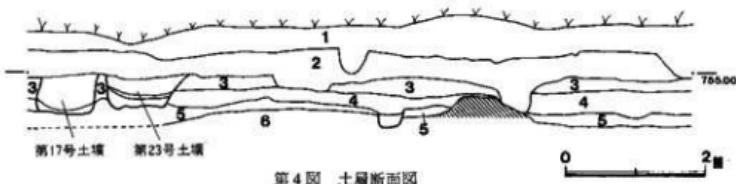


第3図 遺構配置図

第4章 層序

田野平遺跡では、基本土層として、下記の通り第1層から第6層まで計6層の土層が堆積している。

- 第1層 耕作土及び盛上層
- 第2層 暗褐色土層（小砾やローム粒子を含む。部分的に焼土や炭化物を混入している。）
- 第3層 暗褐色土層（粘性があり、しまりも強い。）
- 第4層 黒褐色土層（粘性があり、しまりも強い。赤色粒子やローム粒子を含む。）
- 第5層 ローム漸移層
- 第6層 ソフト・ローム層



第4図 土層断面図

各土層の堆積状態は、発掘調査区域中央部東側が比較的良好な遺存状態を示している。良好な地点では、現表土である第1層より第6層上面まで約130cmの厚さで堆積している。第1層中の盛上層は、発掘調査区域北側においては、ほとんど検出されていない。また、第2層から第5層に關してもほぼ同様の傾向を示し、東側では約20cmから50cm程の厚さで堆積しているが、西側に向かうにつれて、薄い堆積となり、まったく検出できなかつた部分もある。第6層は、所謂「地山」であるが、大小の花崗岩の岩塊を多く含んでいる。

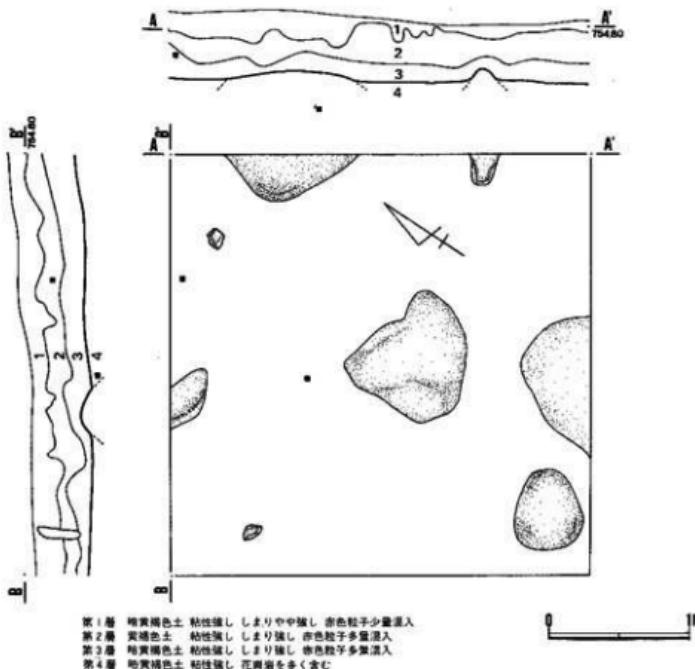
各時代の遺構・遺物等の検出された層位は、土層の堆積状態によって多少の差はあるが、基本的には以下の通りである。まず、先土器時代の遺物（剣片）は、第5層下部から第6層上部において検出された。縄文式時代の遺構・遺物は、早期から後期にわたって検出されているが、いずれも第4層中に包含されている。平安時代の遺構・遺物は、遺構について第3層上面において確認することができ、他方、遺物については同層中はもとより、後世における耕作等による転地返しのため第1・2層からも検出されている。

(野崎 鈴五)

第5章 先土器時代の遺物

第1節 ローム層中（B区）出土の遺物（第5図・第6図7・8、図版3）

先土器時代の遺物は、炭土や耕作土中より数点検出されており、歴史時代・縄文式時代の遺構調査終了を待って先土器時代の調査を開始した。調査区域は、ローム層の保存状態の良好な北西部に一辺3mのグリッド2ヶ所を設定し、遺構・遺物の検出につとめた。しかしローム層を約40cm掘り下げたところで花崗岩の群在する層につきあたり、それ以下の調査を断念せざるを得なかつた。



第5図 先土器（B区）遺物散布図及び土層断面図

A区では何らの遺構・遺物も検出されなかった。

B区は、僅かに2点の小剝片（第6図7・8）が出土したのみで、遺構は検出されなかった。

第2節 耕作土中出土の遺物

先土器時代にともなうと思われる遺物は、いずれも遺構外から検出された9点の剝片である。大和村での出土例は珍らしいのでそのすべてを図示した。石材はいずれも石英安山岩質細粒凝灰岩である。

第6図1は欠損部を有するが、一側面に片側からの剥離調整が綿密に施された断面三角形の石核石器である。

第6図1は大型の細長い剝片で、全面に剥離痕跡をとどめる。

第6図3～6は薄い剝片で、一部に調整痕をもつもの（4）や、自然面を残すもの（5）がある。

2・7・8は非常に小さい剝片で、微調整の際剥離されたもの（7）と自然面を残すもの（2・8）がある。特に8は自然面を表裏に大きく残す小原石で、人為的な加工がなされたとは思えない。

（澤田大多郎）

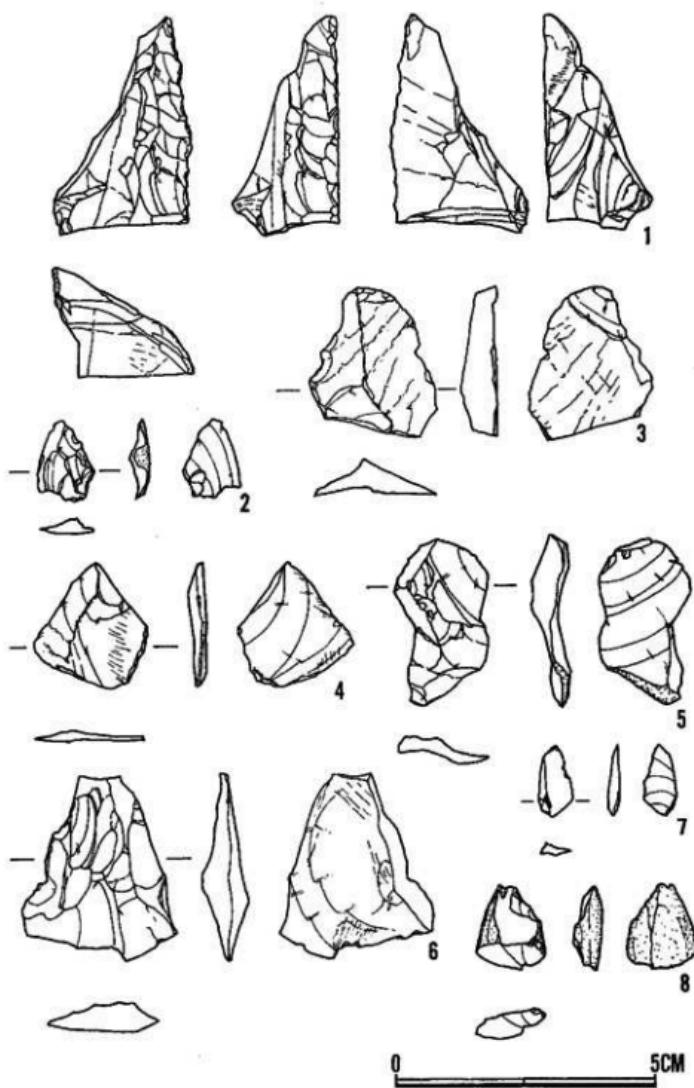
第6章 縄文時代の遺構と遺物

多くは後世の耕作などによる破壊をうけているが、僅かに土壇7、小堅穴状遺構1が発見されたにすぎない。

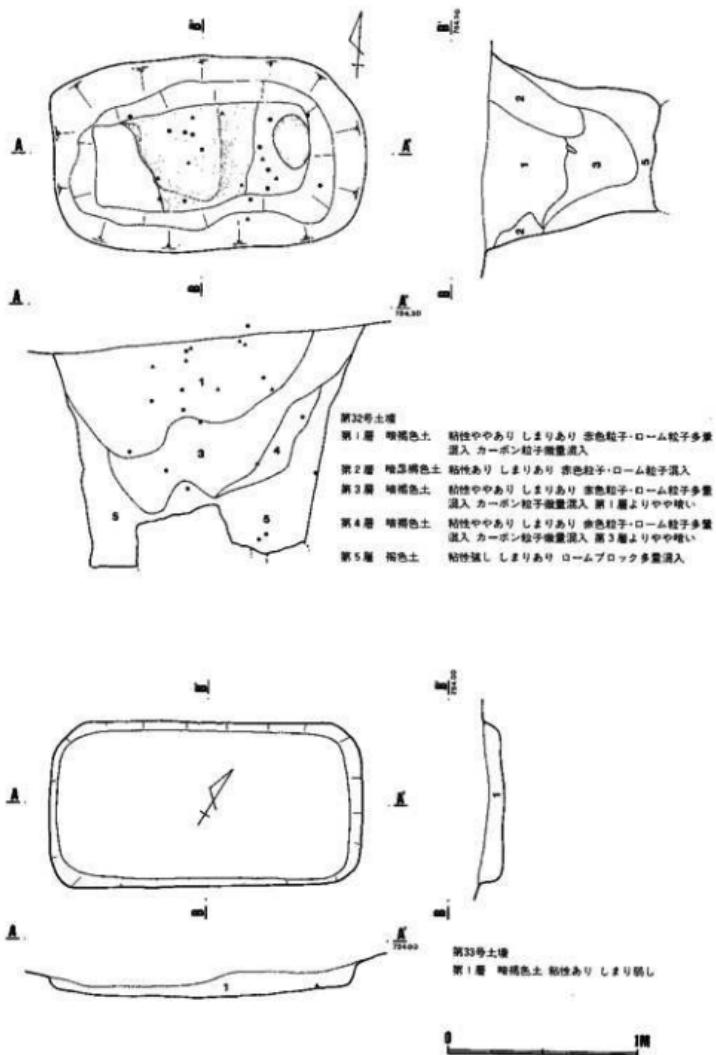
第1節 土壇（第7図・図版4-3）

7基が検出されているが、後世の破壊をうけており遺存状態はよくない。それらはいずれも歴史時代の土塙墓群と重複しない南東部に、弧状を呈するかの如き分布状態を示している。しかし、その構造・性格は一定していない。

第32号土壇（第7図）は、発掘調査区域のはば中央部に位置し、規模175×105cm、深さ130cmの隅円長方形を呈する。長軸方向はN-85°-E。下位は花崗岩層に達する深い土壇である。

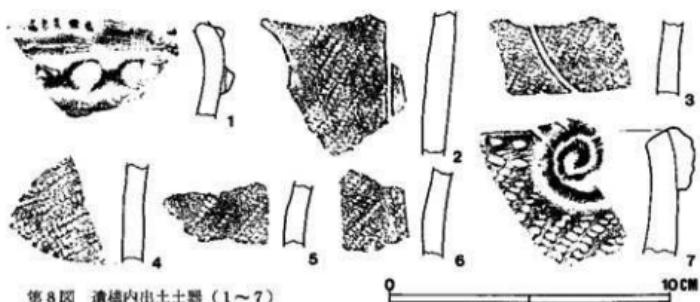


第6図 先土器時代石器尖端図（1～8）



第7図 織文式時代土壙（第32・33号土壙）平面図及び土層断面図

遺物は縄文土器が10数片出土している。



第8図 遺構内出土土器（1～7）

第8図1は、内湾する口縁部近くの深鉢形の破片で、横走する隆帯上に半截竹管による連続刻文と指捺が二条めぐる前期末葉の土器である。

同2～6は、同一個体と思われる鉢形の破片で、節の固い単節縄文がまばらに浅く斜走し、その後に一部を磨消したり、弧状あるいは直行する沈線が施文される。後期前葉に属する土器である。

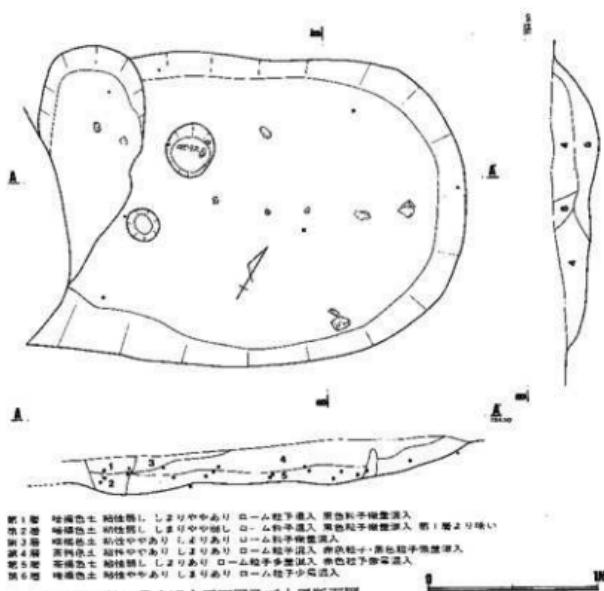
第2節 小堅穴（第7図、図版4-1）

調査区域のはば中央部に位置し、その大部分は第3号住居址や後世の擾乱をうけており保存状態はよくない。規模は260×185cmの不整円形を呈し、断面は皿状になだらかに傾斜する深さ25cmの小堅穴である。

土器はいずれも細片で、図示できたのは第7図のみである。7はやや内湾する深鉢形の口辺部片で、節が横太の斜行する単節縄文が全面に施文され、口縁直下には2列の刺突文がめぐり、その上部に渦巻状の突起が貼付されている縄文中期中葉の土器である。第11図27と同一個体である。

石器は定形的なものではなく、一部に削製痕のある断面三角形の剝片1点（第8図1）と薄い剝片3点（2～4）が出土している。石材は1はメノウ、2は真珠岩、3はチャート、4は石英安山岩質細粒凝灰岩である。

（澤田大多郎）



第9図 第1号小窯穴平面図及び上層断面図

第3節 遺構外出土の遺物

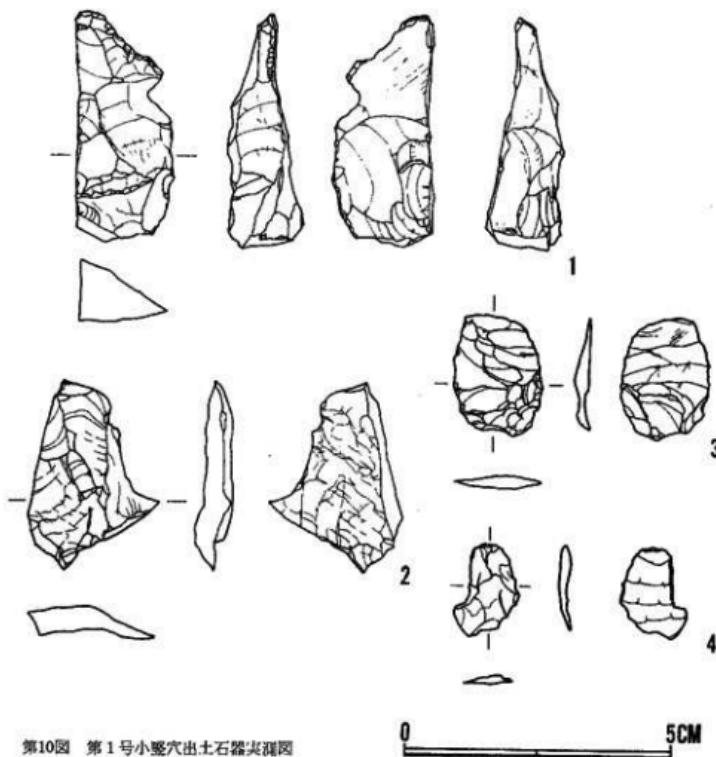
本調査区域において発掘されたり、耕作土中さらに歴史時代の遺構の覆土中などより出土した遺物に土器・石器がある。

A. 土器 (第11~13図、図版5~7)

土器はいずれも破片で、器形の推定し得るものは1点もない。しかし早・前・中・後期にわたる時期のものが約300片発見されており、特に中期後半から後期前半のものが大部分を占めている。尚、胎土中にはいずれも雲母片を多く含むのが木遺跡出土土器の特徴の一つである。

第1群土器：沈線と連続する刺突文を主体とする早期中葉に属する土器群すべてで7片である。

第1図1~4は、浅い沈線と横走する断面三角形の連続刺突文を組合せたもので、胎土中には極く少量の纖維と非常に多くの雲母片を含む。色調は暗褐色を呈す。



第10図 第1号小堅穴出土石器実測図

5は厚手の土器片で、ややホリの深い不規則な刺突と2本1組による短い沈線を矢羽根状に配したもので、繊維を含んでいない。

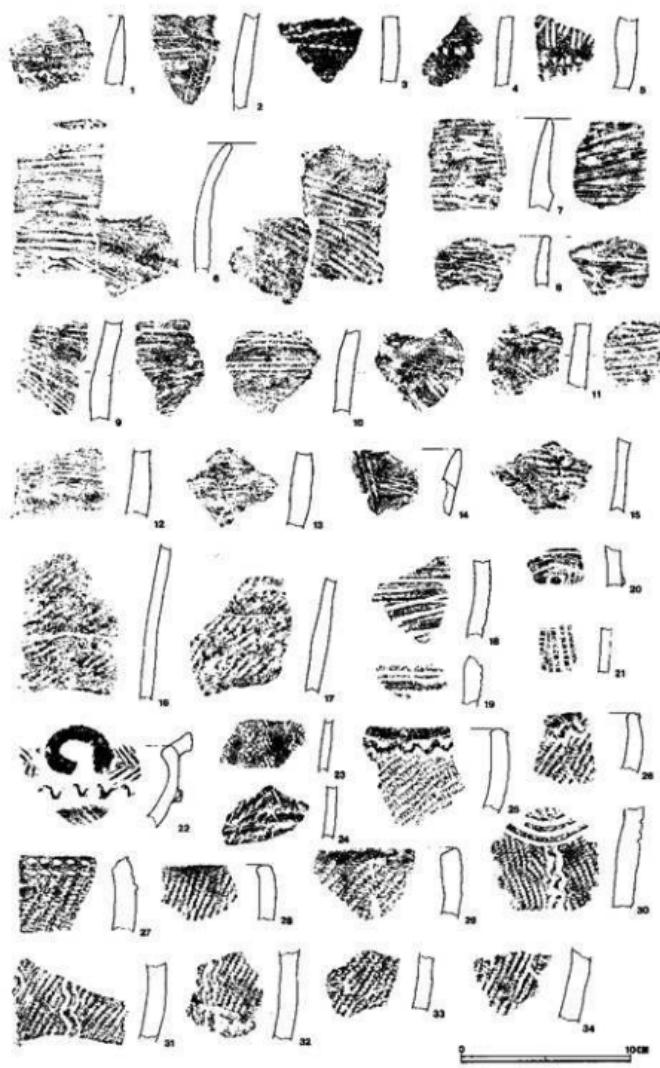
第2群土器：胎土中に多くの繊維を含む貝殻条痕文を主体となす早期末葉の土器群で、20数片出土している。

6～11は、表裏のほぼ全面に貝殻条痕文が横・斜に施文されたもので、口唇部に刻目を有するもの（6）や、口縁下2cmに一条の微隆起線が横走するもの（7）もある。

12・13は表面のみに条痕を有するもので、表裏ともに研磨されていない。

14は表面が研磨された口辺部片で、条痕は非常に浅い。

第3群土器：前期後半の土器は僅かに9片であるので一括した。



第11図 遺構外出土土器一その1—(1~34)

1類土器 15~17は、胎土に纖維を含まない凸凹のはげしい器面に、無節の斜縄文を施したもので同一個体である。

2類土器 18・19は半截竹管によるホリの深い平行沈線が横走する。

3類土器 20は弧状の半截竹管文の上に径8mm程度の円形浮文が付けられたものである。

4類土器 21は半截竹管により表出された縦の隆帯上に同じく半截竹管によって横位に施文され筋盤目状な文様を呈する土器である。

第4群土器：中期初頭の土器で、3片出土している。

22は内溝する口縁部に半截竹管による平行沈線が矢羽根状にめぐり、その上に半円状の把手がつく。さらにその下位（最大径）に指状のもので押捺された隆帯がめぐり、胴上半部には単節斜縄文が施文される。

23・24はよく研磨された胴部の器面上に、結んだ縄を縦に回転させた結節縄文と無文部を組合させて文様としたものである。

第5群土器：本遺跡で土体となす中期後半の土器で、約200片が出土しているが、その多くは無文や磨滅がはげしい。

a. 繩文を主要文様あるいは地文とするもので、約40片である。

1類土器 無文部と縄文部を区画するように口縁部直下に波状の隆帯をめぐらすもの（25・26）や刺突文（27）をめぐらすものがある。尚、27は第8図7と同一個体の土器である。

2類土器 口縁部直下に縄文のみがめぐるもの（28・29）である。

3類土器 30~34は地文としての縄文上に半截竹管やヘラ状施文具による懸垂文や弧状の沈線を施したものである。

4類土器 第12図35~37は同一個体と思われるもので、器形はやや内溝する口縁部が波状を呈し、その部分に横状の把手を有する。文様は縦走する沈線で区画された中に無節の縄文が施文されたものである。38・39はやや湾曲する胴部に縦走する沈線で区画された内側に粗い無節の縄文を配した後、その内外をヘラ状工具で削平しているものである。

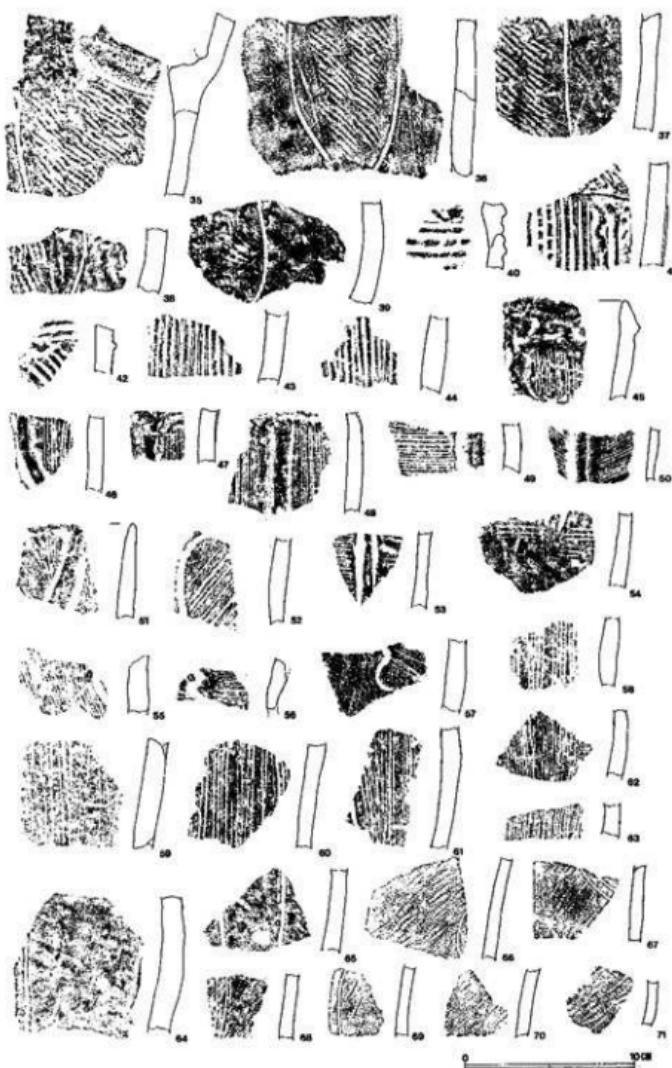
b. 条線・沈線を主要文様あるいは地文とするもので、約80片である。

1類土器 半截竹管などにより表出された平行・懸垂状の隆帯をもつもの、その一部には刻目を有するもの（40・41）もある。

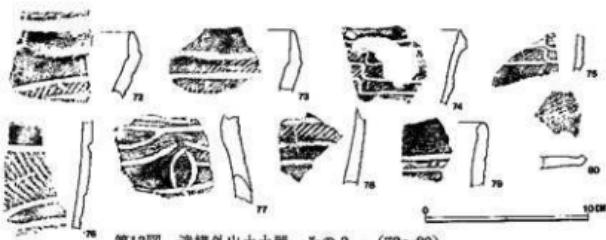
2類土器 半截竹管などによる沈線が縦走するもの（42~44）である。

3類土器 隆帯と集合条線で構成された土器である。45~47は口辺部近くの破片で、円形あるいは梢円形状にめぐる隆帯によって区画された内側に縦走の条線を有するものであり、48~50は胴部に縦走する区画されない隆帯をはさんで、集合条線が縦・横・斜に施文されたものである。

4類土器 沈線と条線で構成された土器である。口縁部近くの破片で、斜行する2本のヘラ状沈線間に施されるもの（51）や梢円状の太い沈線間に半截竹管による集合沈線をもつもの（52）があり、胴部には2本の太い縦走の沈線の左右に集合条線をもつもの（53・54）や懸垂状の左右



第12図 道橋外出土土器—その2—(35~71)



第13図 遺構外出土土器—その3—(72~80)

にもつもの(55~57)などがある。

5類土器 脱部に継走する条線で文様を構成するもので、58~63は研磨されていない素面の上に継走の条線を集合させたものである。

第6群土器：後期前半に属する土器で、12片である。

1類土器 やや厚手の深鉢形土器で、沈線が胴下半部まで継走する以外は無文(64・65)である。

2類土器 燃りの固い單節繩文が浅くまばらに斜走し、その一部が研磨されたもの(66~71)である。その中には弧状あるいは直行する沈線をもつもの(66~69)もある。

第7群土器：磨消繩文を主体とした後期中葉の土器であり、約30片である。

1類土器 平口縁の深鉢形土器で、口縁部がやや内側へ逆「く」字形に曲折し、胴下半部から底部にかけてやや反ると思われる器形のもの(第13図72~75・78)である。表面は刻目を有する小突起と数条の帶繩文がめぐり、裏面は曲折する部分が一条の回線を呈する。

2類土器 頭部で若干くびれる器形で、胴上部にヘラ状施文具による沈線と繩文によって各種の文様を構成するもの(76・77)である。

80は網代痕を有する薄手の底部の破片である。

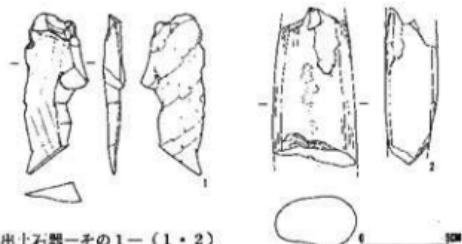
B. 石器(第14・15図)

本遺跡の繩文時代の石器は、磨製石斧1点、石鎌4点(未成品含む)、スクレーパー1点、その他剣片約40片である。これらは繩文時代早・前・中・後期の土器に伴出するものと思われるが、層位的にとらえることができなかった。しかし大部分は中期後半から後期中葉の時期の所産と思われる。

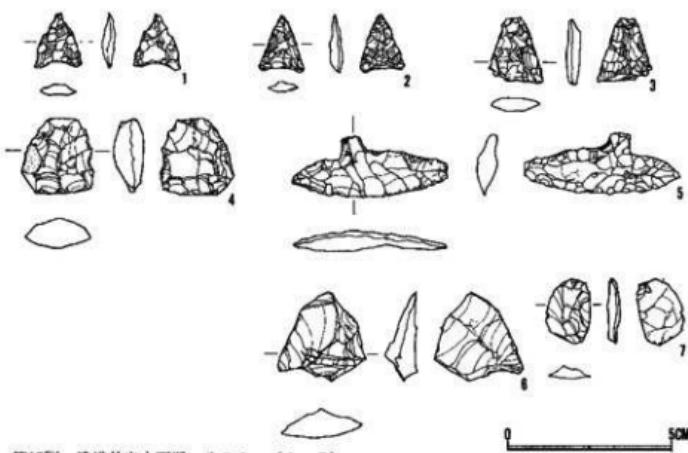
磨製石斧(第14図2)

乳株状を呈す大型品で、刃部と頭頂部を欠損する胸部破片である。石材は細粒凝灰岩である。

石鎌(第15図1~4)



第14図 速構外出土石器一その1—(1・2)



第15図 速構外出土石器一その2—(3~7)

完形品は無茎のえぐりの浅い小型品で、全面に細かい調整痕がある（1・2）。3は先端と基部を欠損したやや大型のもので、4はおそらく製作途中のものと思われる。石材はいずれも黒曜石製である。

スクレーパー（第15図 5）

横長のもので、細いつまみ部を有する器形で、全体が押圧刻離による細い調整がされており、断面は菱形を呈する。石材は石英安山岩質細粒凝灰岩である。

剥片（第15図 6・7）

大部分は調製痕がない小剥片で、わずかに図示した2点の一部にのみその痕跡がみられる。石材は6は珪質泥岩、7はチャートである。

（澤田大多郎）

第7章 平安時代の遺構と遺物

調査区域内からは、堅穴住居址4軒（うち1軒は柱穴より復原）、土壙41基、集石土壙2基、配石遺構1個所が検出されている。

第1節 堅穴住居址

4軒が検出されており、このうち第3号住居址は柱穴より復原したものである。後世の擾乱が深く達しているものもあるが、同時代の所産と考えられる土壙との重複はない。

1. 第1号住居址（第16・17図、図版8-1・2）

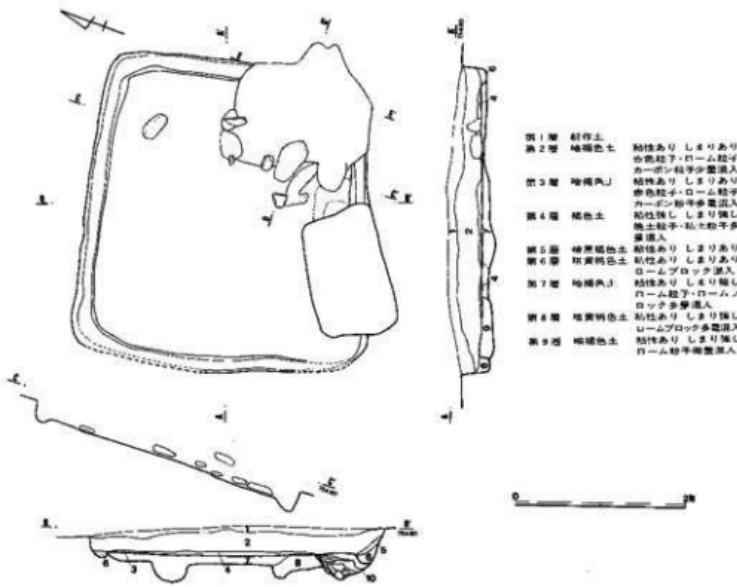
本住居址は、調査区域の南西部、第4号住居址の北西約4mの地点に位置している。平面形は、四丸長方形を呈し、その規模は、長径（東西）約3.75m、短径（南北）約3.25mを計測する。南東隅にはカマドを付設しており、カマド主軸方位はN-94°-Wを指している。

遺構の遺存状態は、比較的良好であり、南西隅の擾乱穴（第2層の盛土層から切りこんでおり、平面形は長方形を呈し、長径約150cm、短径約95cmを計測する。畠の苗床もしくは芋穴かと思われる）を除くと、遺構のうち西側では黒褐色土中に構築されているために一部判然とはしないがおおむね全容を知ることができる。

床面は、およそ平坦であり、カマド周辺部および中央部ではよく踏み締められているのに対して、壁際ならびに西側では軟弱である。この床面直上には、中央部を中心として約1cmの薄い焼土堆積層が認められ、このことから本住居址が火災をうけたことが推察される。また、東側の床面上からは、東壁と平行して、東壁より約90cm、北壁より約60cmの地点から、長径約30cmを計測する扁平の花崗岩が約80~90cmの間隔で3個検出されている。この石は、床面と密着し、しかも焼成をうけて赤化していることから、あるいは礎石として用いられたものであるかもしれない。床面と壁との間には、カマドの部位を除き壁溝が開削している。壁溝は、断面形が「U」字形を呈し、その規模は、幅約20cm、深さ約4~12cmを計測する。壁は、まっすぐ立ちあがり、現存最大高約50cmを計測する。

南壁中央部に隣接して床面下からは、所謂、床下土壙と称される遺構が検出されており、そのうち西側半分は擾乱穴によって切られて消失している。土壙の平面形は、長辺円形を呈するものと思われ。その規模は、短径約35cm、深さ約16cmを計測する。土壙内には、灰層および焼土がつめこまれている。

カマドは、南東隅に付設されており、煙道部の一部は壁の外側（東方）に突出している。遺存状態は、東側半分では良好であるのに対して、西側では左・右両袖部が古い時代の擾乱、もしくは意図的な破壊かの何れかの理由によって崩壊されており、そのため良好ではない。カマドの規



横は、東西（主軸）約135cm、南北約135cmを計測する。

カマドの構造は、袖部のつくりに特徴を見いだすことができる。すなわち、袖石を配置・固定するために、地山を整形し、そこに断面形が畝状を呈する掘り方を設け、袖石を配したのち、外側をやや大形の花崗岩と粘性の強い腐植土によって被覆されている。掘り方の規模は、幅約10~15cm、深さ約7cmを計測する。袖石として、調査時では西側袖部において燃焼部側が焼成をうけて赤化した幾分丸味を帯びた扁平な大形の花崗岩が1箇検出されている。さらに、東・西両袖部には、袖石を配するためと思われる掘り方が各々より検出されており、このことから帰納して構築当初には、袖石が各々2~3箇づつ配されていたものと想定される。天井部は、西側土層断面において陥没した状況が観察される。燃焼部は、平面形が梢円形を呈しており、その規模は、東西（主軸上）約60cm、南北約50cm、深さ約10cmを計測する。燃焼部中央には、焼土層が約6cmの厚さで堆積しており、この下には黒色の灰層が約5cmの厚さで堆積している。煙道部は、現存長約60cmを計測し、燃焼部より約40度の勾配で東側に延びている。煙出し部の直径は約10cmを計測する。

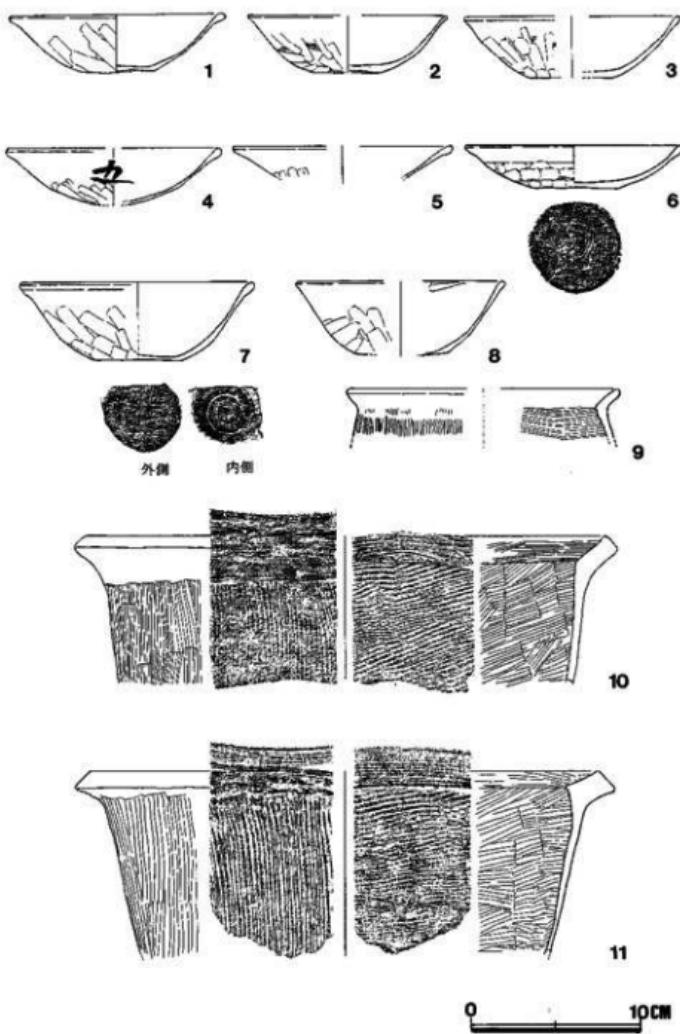
遺 物

壺形土器（第18・19図1~4・7・8・13、図版9・10—1~4・7・8・13）

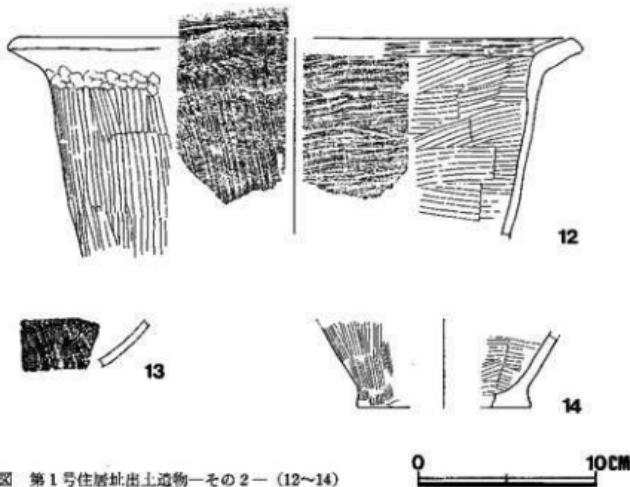
1~3は、口径約11.8~13.0cm、底径約3.8~4.0cm、器高約3.4cmを計測し、法量的に口径>底径×2の範疇にはいるものである。器形は、底部より緩やかに内彎し、口唇端部が玉縁を呈する。器面は、底部では回転糸切り後、糸切り痕を残さず全面箆削りを、器体部では下半を中心として斜め箆削りによって調整されている。1は、底部を一部剥離する完形品であり、2・3は、各々四分ノ一個体を遺存する。4は、法量が推定復原口径約12.8cm、器高約3.4cmを計測し、器体は三分ノ一を遺存する。器形は、浅い丸底と思われる底部より緩やかに内彎し、口唇端部が玉縁を呈する。器面は、器体部下半から底部にかけて斜め箆削りによって調整されている。器体部中央には、縦1.4cm、横2.6cmの範囲に「五」の文字の墨書きが施されている。7・8は、1~4の壺形土器と比較すると法量的に大きく、推定復原口径約12.4~14.0cm、底径約5.2~5.6cm、器高約4.3~4.7cmを計測する。器形は、底部より深く緩やかに内彎し、口唇端部が玉縁を呈する。器面は、底部では回転糸切り後、箆削りにより、器体部下半では斜め箆削りによって調整されている。7は、みこみ部に暗文が観察できる。器体は二分ノ一個体を遺存する。13は、壺形土器下半部か。器面には、箆削りによる調整後、5本の線刻によるヘラ記号が観察できる。

皿形土器（第19図5・6、図版9—5・6）

5は、四分ノ一個体を遺存する皿形土器で、推定復原口径約13.0cmを計測する。口唇端部は玉縁を呈する。器面は、器体部下半を斜め箆削りによって調整されている。6は、五分ノ一個体を欠損し、法量は、口径13.0cm、底径5.4cm、器高2.5cmを計測する。器形は、底部より緩やかに内彎し、口唇端部は玉縁を呈する。器面・内面とも丁寧に仕上げられており、器面では、器体部下



第18図 第1号住居址出土遺物一その1—(1~11)



第19図 第1号住居址出土遺物—その2—(12~14)

半を横位の箝削りによって調整されており、底部では、回転糸切り後、周囲を箝削りによって調整されている。

変形土器（第18・19図9～12、図版9・10-9～12）

9は、小形変形土器で、口縁部のみ五分ノ一個体を遺存する。法量は、復原口径約16.0cmを計測する。器形は、口縁部が「く」字状に大きく外反する。器面には、頭部より縦位の6～7条を単位とした幅の狭い刷毛目調整が施されており、他方、内面には、頭部より胴部にかけて横位の刷毛目整形が施されており、内面の整形は、あたかも貝殻条痕文の如く深い沈線で行なわれている。10～12は、器形がおおむねまっすぐ立ちあがる胴上部と口大きく外反し肥厚する口縁部からなる。とりわけ、11は、口縁部の肥厚が頭著である。法量は、推定復原口径約32.0～32.6cmを計測する。器面には、最大径を有する口縁部直下より横位の刷毛目調整が施されている。このうち12は、刷毛目調整が始まる上位に、幅約2cmにわたり棒状工具によるものと思われる調整痕が認められる。内面は、口縁部では回転刷毛目による整形を、胴部では6～7条を単位とする横位の刷毛目整形が施されている。10・11は、六分ノ一個体を、12は、二分ノ一個体を遺存する。なお、器面にはススの付着を認めることができる。

底 部（第19図14、図版10—14）

14は、変形土器、ないしは羽釜の底部と思われる。底径約10.0cmを計測する。器形は、底部よりいったん内側にはいりながら立ちあがり、そこから緩やかに内側しながら上位に延びている。器面には、縦位の刷毛目による彫刻が、内面には、横位の刷毛目による整形が施されている。底部には木葉痕が認められる。

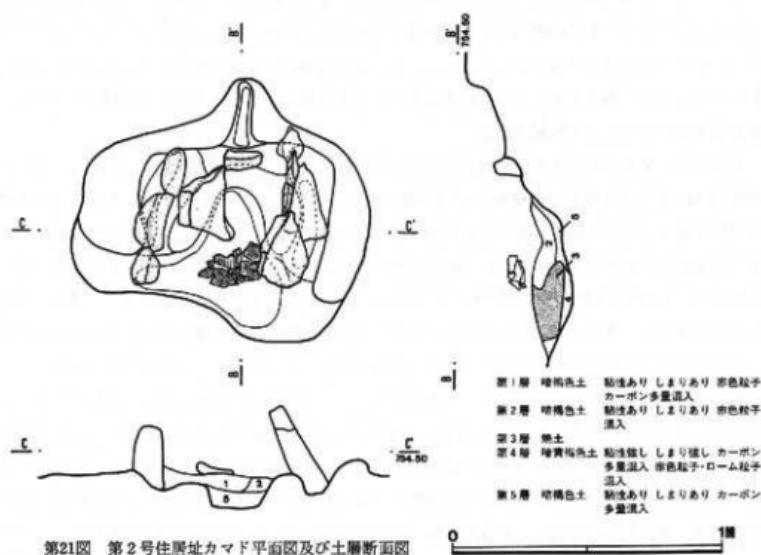
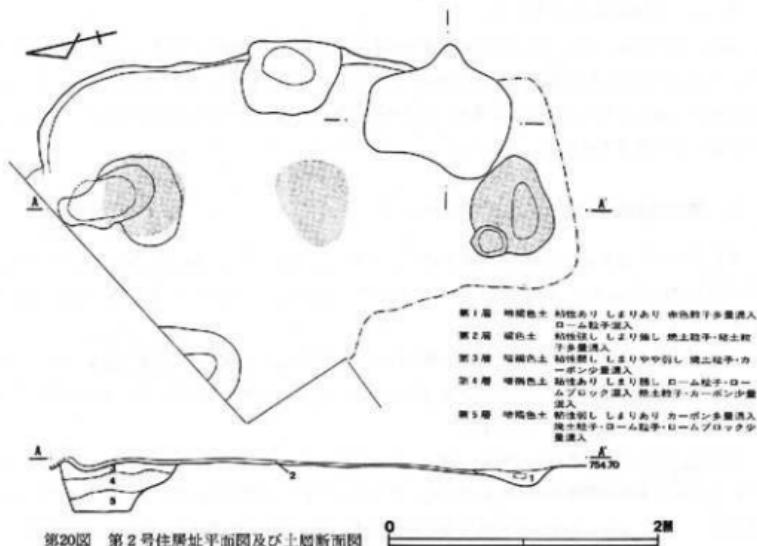
2. 第2号住居址（第20・21図、図版10・11）

本住居址は、調査区域の北側中央部に位置しており、平面形は円角矩形を呈し、その規模は南北約3.8mを計測する。南東隅にはカマドを付設しており、カマド主軸方位はN-75°-Wを指している。

遺構の遺存状態は、良好ではなく、とりわけ後世の耕作による擾乱が床面まで達しており、そのため西側半分および南側では床・壁ともに消失し、他方、遺存する東側においても床面の上位まで擾乱が著しくはいりこんでいる。

床面は、残存部では壁の周辺部を除き、よく踏み締められており、若干の凹凸はあるもののおむね平坦である。床面の高さ上からは、焼土や細かな炭化物が検出されており、このことから本住居址が火災をうけていることが推察される。壁は、東壁ならびに北壁の一部を残存するのみで半分以上を消失しており、残存部ではおおむね垂直に立ちあがり、現存最大高約80cmを計測する。また、東壁より約60cm西側の北壁に隣接した床面下からは、平面形が不整長楕円形を呈する所謂、床下土壇を検出することができた。この土壇の規模は、長径約90cm、短径約68cm、深さ約38cmを計測する。覆土中からは、細かな炭化物、焼土が検出され、木床下土壇の機能がカマドと密切な関係にあることが想像される。

カマドは、東壁のおよそ南隅に付設されており、煙道部の一部は壁の外側に突出している。その規模は、東西（主軸上）約92cm、南北約110cmを計測する。カマドの構造は、袖部・天井部ならびに五種に石材を用いていることを特徴としており、このうち袖部は、袖石を配置するために地山を整形して柄穴を設けており、そのため断面形は歯状を呈している。この袖石を納めるための柄穴は、幅約10~12cm、深さ約8cmを計測する。袖石は、北側では3個、南側では2個（小さいものを含めると3個）が遺存しており、このうち北側では砂岩の円盤が用いられ、一方、南側では剥離加工された扁平の幾分硬質な河原石が用いられている。いずれも石の内側（焼成部側）は、焼成をうけて赤化している。カマドの天井部には、調査時には燃焼部に接していた平面形が台形（長辺は弧状を呈する）を呈する扁平の河原石が置かれていたものと思われ、そのため燃成部と接する部位（片面）は、ススが付着し、焼成をうけて赤化している。燃焼部は、袖石間に浅い掘りこみを設けて構築されており、その規模は、東西約55cm、南北約45cm、深さ約10cmを計測する。なお、燃成部の中央には、東西約32cm、南北約24cm、深さ約8cmを計測する掘りこみが認められるが、これは、おそらくカマド構築当初における焼成部の掘りこみと思われる。煙道部は、



現存長約25cmを計測し、燃焼部よりいったん緩やかに立ちあがり、五徳を置くための平坦部を設けたのち、約15度の勾配で東側に延びている。

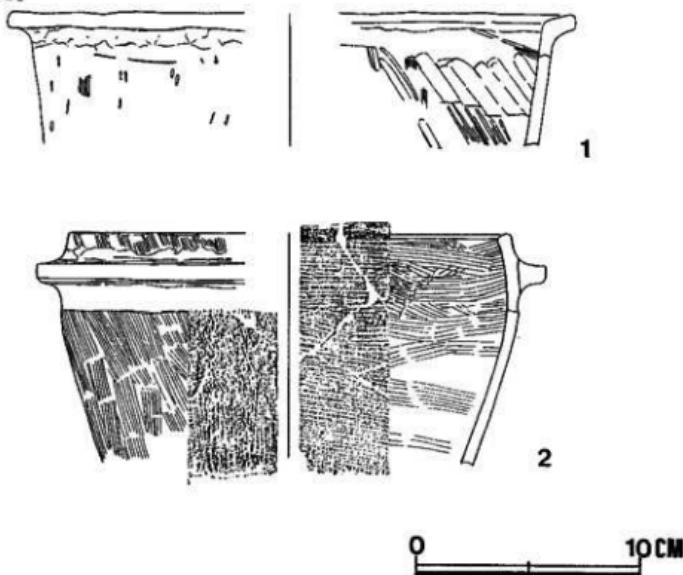
遺物

菱形土器（第22図1、図版11-1）

1は、口縁部を五分ノ一個体遺存する菱形土器で、法量は、推定復原口径約25.4cmを計測する。器形は、直線的に延びる胴上部とそれに続く水平に大きく外反する口縁部とからなる。器面は、口縁部直下を棒状工具で調整し、以下胴部はナデ調整が施されている。内面は、胴上部より斜位のナデ痕形が施されている。

羽釜（第22図2、図版11-2）

2は、五分ノ一個体を遺存する羽釜で、法量は、推定復原口径約19.8cm、鈎径（最大幅）約23.2cmを計測する。器形は、胴上部で緩やかに内彎し、口縁部で再び大きく内彎する。鈎は、口縁下約1.5cmに接合され、幅約1.3cmを計測する。器面は、口唇端部では横位の、それ以下は縦位の刷毛目調整が施されており、鈎との接合部では、上位を棒状工具により整形された後、横位の刷毛目調整により、下位を指頭により各々調整されている。内面は、横位の刷毛目整形が施されている。



第22図 第2号住居址出土遺物（1・2）

3. 第3号住居址

本住居址は、調査区域内のほぼ中央部に位置しており、第1号小窓穴を破壊して構築している。

遺構の遺存状態は、きわめて悪く、壁・床面とも消失し、そのため柱穴およびカマド燃焼部の基部と思われる部位のみを検出するにとどまった。

柱穴は、4本検出されており、その規模は直径約20~25cm、深さ約20~30cmを計測する。柱穴間の距離は、東西間に比べて南北間の方が長く、その距離は東西間約2.0m、南北間約2.5mを計測する。また、南東部に位置する柱穴の南側約50cmには、平面形が橢円形、断面形が皿状を呈する焼土を作なう浅い土壇が検出されている。その規模は、長径約55cm、短径約50cm、深さ約3cmを計測する。この土壇は、おそらくカマド燃焼部の基部に比定されるものかと思われる。

4. 第4-A・B号住居址 (23・24図、図版12)

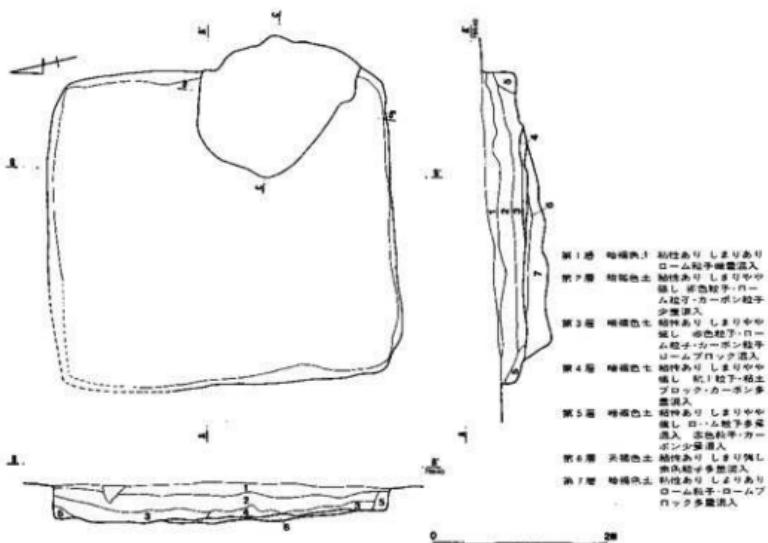
本住居址は、調査区域の南端部、第4号住居址の南東約4mの地点に位置している。当住居址は、他の住居址とは異なり建て増しが行われている。(以下、新しいものをA号住居址、古いものをB号住居址と呼称する) A号住居址の平面形は、隅丸長方形を呈し、その規模は東西辺約3.6m、南北辺約4.0mを計測する。B号住居址は、前者よりも一回り小さく、推定規模東西辺約2.7m、南北辺約3.2mを計測する。A・B号住居址ともカマドは南東隅の同一場所に付設しており、カマド主軸方位はN-71°-Wを指している。

遺構の遺存状態は、カマド周辺部を中心として南側では擾乱が深く達しており、そのため部分的に床面が消失している。なお、北西隅の壁は、試掘調査の際に誤って破壊してしまったものである。

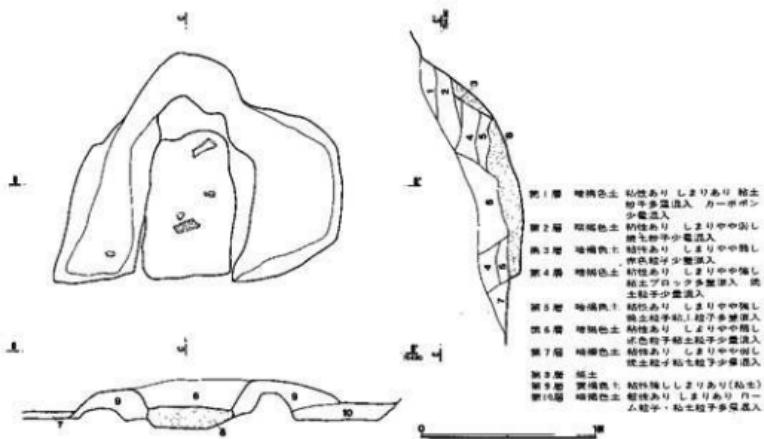
床面は、A号住居址では、壁際の約30~50cmの範囲にわたり中央部より約3~5cm程高まり、あたかもベッド状を呈しており、ここを除く中央では緩やかな起伏に富みながらもおよそ平坦であり、よく踏み締められている。床面直上からは、他の住居址と同様に焼土が一面に検出されており、本住居址が火災をうけたことが推察される。B号住居址の床面は、A号住居址貼床下約cmより検出され、深い荒掘りの上に構築されており、おおむね平坦でよく踏み締められている。壁は、垂直に立ちあがり、現存最大高約50cmを計測する。

カマドは、南東隅に付設されており、煙道部の一部は壁の外側(東方)に突出している。カマドの遺存状態は、後世の耕作による擾乱が深く達しており、そのためあまり良好ではない。その規模は、東西(主軸)約130cm、南北約160cmを計測する。

袖部は、地山を整形して構築されており、そのうち芯にあたる部分は幅約12~16cm、高さ約6~12cmの規模でローム(地山)が突出している。この袖部の芯と燃焼部との間には約5~10cm程の平坦面があり、あるいはここに袖石を配したものであるのかもしれない。芯の上位には、土が



第23図 第4-A・B号住居址平面図及び上層断面図



第24図 第4-A・B号住居址カマド平面図及び土層断面図

被覆されている。燃焼部は、平面形が隅丸長方形を呈しており、その規模は、東西約70cm、南北約50cm、深さ約10cmを計測する。天井部は、煙道部とともに陥没している。

遺物

小形壺形土器（第25図1・2、図版13-1・2）

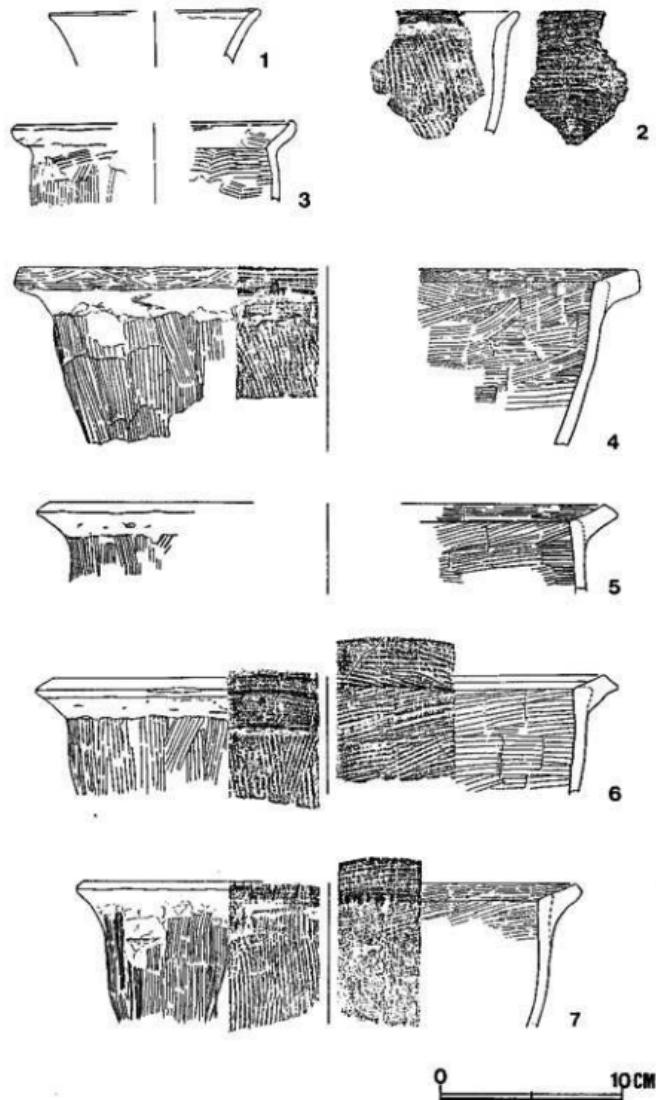
1・2は、小形壺形土器の破片であり、このうち1は、器形が頸部内面に明瞭な縦を残し、これから口縁部が「く」字形に大きく外反して口唇端部でまっすぐ立ちあがる。器面は、胴部以下を縦位の刷毛目によって調整されており、内面は、口縁部より横位の刷毛目整形が施されている。2は、直線的に立ちあがる胴部、それに続く緩やかに外反する口縁部からなる破片である。器面・内面調整は、1と同様に器面では縦位の、内面では横位の刷毛目調整が施されている。

壺形土器（第25図4～7、図版13-4～7）

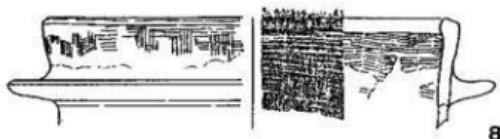
4～7は、器形がおおむね直線的に延びる胴上部、さらには、これに続く大きく外反し肥厚する口縁部を有することで共通している。また、器面および内面の調整にも、原則的に器では、口縁部下より胴部にかけて6～8条を単位とする縦位の刷毛目調整が施されており、他方、内面では、横位の刷毛目整形が施されている点にも共通の要素が認められる。4は、5～7と比較すると、後者では胴上部が直線的に延びているのに対して、本土器では緩やかに内彎している。器面調整において、口唇端部にも刷毛目調整を施していることを特徴とする。器体は、四分ノ一個体を遺存し、法量は、推定復原口径約34.8cmを計測する。5・6は、器形・調整のうえできわめて類似しており、器面調整では、口縁部が横ナデ調整が施されている。法量は、推定復原口径約31.8～32.0cmを計測する。7は、4～6と比較すると法量的に幾分小さく、推定復原口径約28.0cmを計測する。器面は、5・6と同様に口唇部では横ナデ、胴部では縦位の刷毛目調整が施されている。内面は、横位の刷毛目整形が口縁部とそれに続く胴上部の一部のみにかけて施されており、以下はナデ整形が施されている。

羽釜（第26図8・9、図版14-8・9）

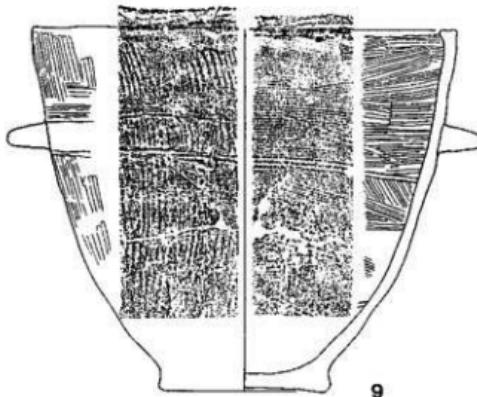
8は、口縁部をおよそ三分ノ一個体遺存する羽釜で、法量は、推定復原口径約22.6cm、鉢径（最大幅）約27.0cmを計測する。器形は、おおむね直線的に立ちあがり、口縁端部で幾分内彎する。鉢は、口縁下約3.3cmに接合されており、幅約2.3cmを計測する。器面は、口縁部より鉢部にかけて縦位の刷毛目調整が施されており、鉢との接合部は、棒状工具で整形された後、鉢接合部の下位を除き横位の刷毛目調整が施されている。内面は、内彎する口縁端部と鉢接合部との間に横位の刷毛目整形が、他の部位ではナデ整形が施されている。9は、口縁部より底部にかけておよそ二分ノ一個体を遺存し、法量は、口径約23.4cm、鉢径（最大幅）約26.2cm、底径約9.6cm、器高約19.9cmを計測する。器形は、底部よりいったん内側にくびれ、ここから縦やかに内彎し、口唇端部は平縁を呈し内彎する。鉢は、口縁下約5.4cmに、幅約2.1cmのものが接合されており、鉢の大半は削離し、消失している。器面は、口唇端部では棒状工具により、口縁部から胴部にかけ



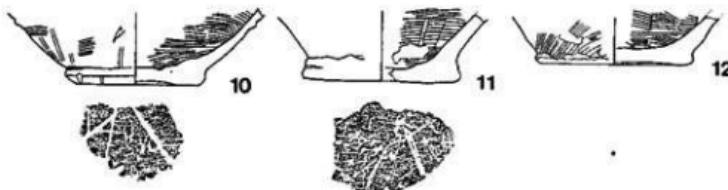
第25図 第4-A・B号住居址出土遺物—その1—(1~7)



8



9



10

11

12



13



14

0 10CM

第26図 第4-A・B号住居址出土遺物—その2—(8~14)

けては縦位に幾分粗の刷毛目により各々調整されており、鉗接合部では刷毛目調整の上に棒状工具によって調整されている。内面は、器面と比較すると密の刷毛目を用いて横位に整形されている。

底 部 (第26図10~14、図版14-10~14)

10~14は、甕形土器もしくは羽釜の底部であり、法量は、推定復原底径約8.6cmを計測する。器形は、底部より肩上、ないしは内側にくびれる形状でいったん立ちあがり、ここから緩やかに内轉している。10~13の器面には、刷毛目による調整痕が施されており、その内面には、底部に至るまで横位の刷毛目整形が施されている。10・11・13は、底部に木炭痕が認められる。

(野中和夫)

第2節 土 壤

本調査区域内から検出された土壤のうち、平安時代の所産と考えられるものは、総数41基がある。土壤は、調査区域内の北側半分に集中して存在しており、土壤間の重複は認められるものの堅穴住居址との重複はない。

本節では、主として事実関係を中心としてまとめるにし、究極の目的としては土壤の性格・機能等を明らかにすることに置いた。

以下、個々の土壤について、形態分類、形態別にみた分布状況、規模、方向、伴出遺物、土質、土壤の形成過程などについて順を追って述べていくこととする。(表-1参照)

1. 形態分類

土壤を分類するにあたり、基準となる要素として平面形と縦断面形(長軸)とを描出することにした。

平面形は、矩形と円形との2類型に大別し、A類・B類とし、このうち前者をさらに隅丸長方形と長楕円形とに分け、I・IIとした。断面形は、「凹」形、舟形、楕形の3型に小別し、a・b・cとし、舟形を呈するものは整然としたものと立ちあがりの緩やかで丸味を帯びているものとに細分し、各々をb₁、b₂とした。

平面形	A類	矩形	I 隅丸長方形
			II 長楕円形
断面形	B類	円形	
	a	凹形	
b		舟形	b ₁ 整然としたもの
	c		b ₂ 緩やかに立ちあがり、カーブに丸味のあるもの

以上の分類に基づいて、土壤に照合するとつぎのことがわかる。

41基の土壤のうち、道構の大半が調査区域外にあるために形態が判然としない第34・38・39・40号土壤の4基を除く37基についてみると、表-2で明らかのように、全体の約84%が矩形を呈するA類型の土壤であり、残りの約16%が円形を呈するB類型の土壤である。

このうち、大半を占有するA類型に属する土壤についてみると、31基のうち長軸円形を呈するIIに属するものは8基あり、約四分の一の割合を占めている。しかし、これをよく観察すると（第33・36図参照）、明確な長軸円形を呈するものはきわめて数少なく、長軸が直線的に延び、短軸が丸味を帯びているものが圧倒的に多い。その意味では、A類型は基本的には開丸長方形を呈するものであると言えよう。

このA類型に属する土壤が、明確な相違点を示すのは、縦断面形ある。

A類型に属する31基の土壤のうち、最も多いのは、I-a類に属する断面形が「圓」形を呈するもので、11基が検出されており、A類の土壤のおよそ35.5%を占めている。しかし、圧倒的に多いのはbに属する断面形が舟形を呈するもので、 $b_1 \cdot b_2$ の両者を合わせると17基が検出されており、過半数弱を占めている。そこで、このb類に属する b_1 と b_2 とを比較するならば、後述の如く、第4図、第27～36図でみられるように、両者には、分布・規模等の上で若干異なりが認められる。すなわち、b類に属する土壤は、断面形でみた場合、基本的には同じ舟形形態を示しているものの、 $b_1 \cdot b_2$ に細分することができる。このことは、後述する如く独自に発展したことを意味しているものと思われる。つぎに、断面形が塊形を呈するcは2基と数少なく、この形態は、場合によっては b_2 の範疇に含めるべきものであるのかもしれない。

表-2 形態分類別にみた土壤一覧表

形 種	土 壤 番 号	総 数 (基)	比 率 (%)
A	I - a	1・10・20・21・22・25・27・30・35・36・37	11
	II - a	5	1
	I - b ₁	4・13・14・15・17・24・29	7
	II - b ₁	—	0
	I - b ₂	6・18・19・23・28	5
	II - b ₂	3・7・8・11・12	5
B	I - c	—	0
	II - c	2・9	2
	a	51・52・53・54・57	5
	b ₂	56	1
	合 計		37
			100

(※ 形態の判然としない第34・38・39・40号土壤の4基は除く)

一方、B類型に属する円形土壠は、6基が検出されており、これを断面形でみると基本的にはaに属している。

2. 形態分類からみた土壠の分布

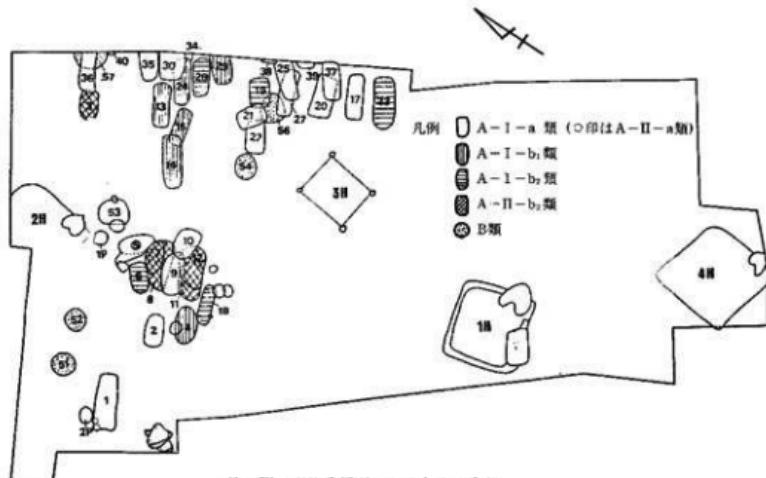
今回検出された土壠は、調査区域内のおよそ北側半分に分布しており、これらは、さらに北東隅、北東中央部、北側中央部、北西隅の4箇所に集中している。

このうち北西隅には、円形を呈する第51・52号土壠と矩形土壠の中で最大規模を誇る第1号土壠とが位置しており、他の3箇所の集中区域と比較すると、土壠の基数が3基と数少なく、形態においてもB類が主体となっており、この点で相違する様相を呈している。

つぎに、土壠と前述した形態分類に基づいて分布状況をみることにする。（第27図参照）

数量的に数少ないB類型に属する円形土壠は、北西隅で第51号土壠と第52号土壠とが隣接しているのを除くと、他の集中区域に最低1基以上分布している。すなわち、調査面積が狭いために断言はできないが、少なくとも円形土壠は、密集する傾向ではなく、むしろ散在して分布する傾向が認められる。

一方、大半を占めるA類型に属する土壠は、比較的形態別に集中して分布する傾向にある。例えば、I-a類に属する7基の上層では、第4・17号土壠を除く5基はいずれも北東隅の集中区に分布しており、しかも、それらは隣接して位置している。同様に、I-a類に属する11基の土壠においても、第1・10号土壠を除く9基は、北東隅および北東中央部にそれぞれ集中して分布



第27図 形態分類別にみた土壠の分布

しており、前者には3基、後者には6基が存在している。さらに北東中央部の土壤集中区では、I・II-b₂類を主体とするもので構成された土壤が分布している。

3. 規 模

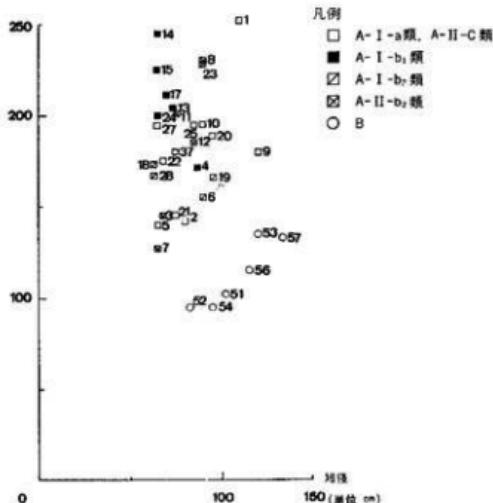
41基の土壤のうち、長軸の規模が判然としない第29・30・34・35・36・38・39・40号土壤の8基を除く33基について、確認面ならびに横底における規模を表-3、表-4からみると、つぎのことが明らかである。

土壤は、長軸長：短軸長の比からおよそ3:1を示すもの。第2グループは、およそ2:1を示すもの。第3グループは、およそ1:1を示すものとがある。

これを表-3に照合すると、第1グループに属するものは、3グループのうちで最も長軸の長いものの集合であり、長軸の規模が約170~250cmを計測するものである。具体的には、第8・11・13・14・15・17・18・22・23・24・27・28号土壤の12基が該当し、これを形態分類別にみると、その内訳は、A-I-b₁類に属するものが5基、A-I-b₂類に属するものが6基で、A-I-a類に属するものは1基である。すなわち、長軸の長いものは、断面形が舟形を呈するものに多いといえる。

第2グループに属するものは、前者と後述する円形を呈する土壤とを除く14基が該当する。こ

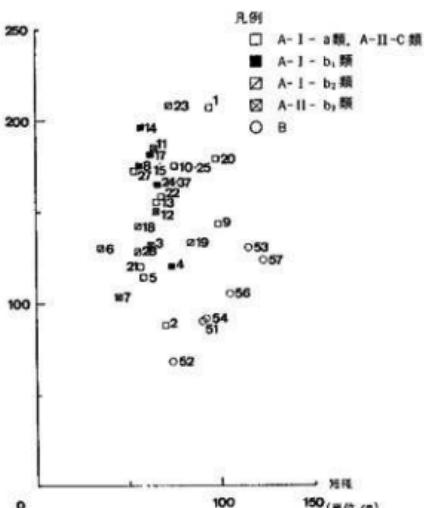
表3 確認面における土壤の規模



のうち、長軸が約250cmを計測する第1号土壌を除く13基は、長軸の規模が約130~195cmと第1グループと比べて幾分短かく、これに対して短軸は約65~95cmを計測し、第1グループと同等もしくは幾分長い傾向にある。形態分類との関係でみると、主としてA-I-a類に属するものが本グループの大勢を占めている。

第3グループに属するものは、B類の円形土壌であり、6基がこれに該当し、その規模が約90~120cmを計測する。

表4 壤底における土壤の規模



つぎに、表4をみると、大勢は、前述した様相と同じ傾向を示しているが、若干の相違的として、b₁に属する土壤の一部には、確認面の規模が第1グループに属しながら、壤底の規模では、その比が2:1の第2グループに属するものも存在する。他方、A-I-b₂類に属する5基の土壤のうちの4基は、短軸の規模がまちまちであるのに対して、長軸の規模が約130cm前後と一定しており、このことが一つの特徴となっている。

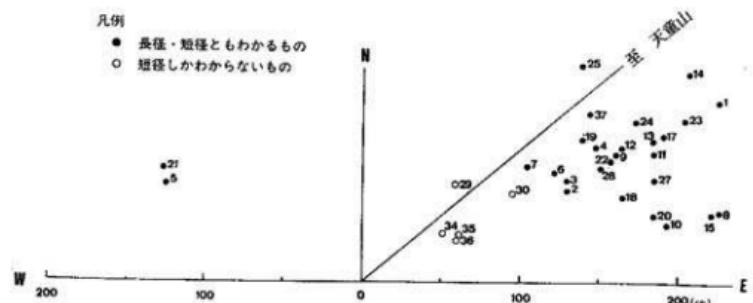
4. 方向

ここで、A類型に属する矩形土壤についてみると、つぎのことがわかる。

35基の土壤のうちで、造構の大半を調査区域外にもつ第34・38・39・40号土壤の4基を除く31基を対象としてみると、第5号土壤と第21号土壤とが北西—南東を指しているのを除くと、残りの29基は北東—南西を指している。このうち後者では、N-43°~79°-Eの範囲内の方向を指している。これをさらに観察すると、N-53°~72°-Eの間に23基が集中しており、実に四分ノ三分がこの方向を指している。また、ここで注目されるのは、N-76°~79°-Eを指す第8・10・15・20号土壤である。後述する上構の形成過程を考慮するならば、各々の土壤は、A-I-a類、A-I-b₁類、A-II(I)-b₂類にそれぞれ属しており、各形態における新旧関係は別問題として、第10号土壤を除く他の3基の土壤は、各々の形態別でみた場合、その重複関係からいざれも古手の様相を示していることは特記に値する。

そこで、同形態に属する土壤間の重複関係と方向性の関連についてみると、北東中央部に位置

表5 矩形土壌における方位と規模（長径）



し、かつA-I-a類に属する第20・37号土壌、第25・27号土壌では、新しく構築されたもの（第37・25号土壌）ほど長軸はより北一南を指している。同様のことは、A-I-b₁類に属する第14号土壌と第15号土壌との間でもいえる。

換言するならば、一・二の事例を除き、各形態間では長軸が東一西を指すものほど古く、北一南を指すものほど新しい様相を呈していることがいえよう。

つぎに、各集中区域ごとにおける形態別の方向性についてみることにする。

北東隅に分布するA-I-b₁類に属する第13・14・15・24・29号土壌では、重複関係から古手の様相が窺える第15号土壌を除き、第13・14・24号土壌は、いずれも同一の方向を指しており、そこには、整然とした意図的な配置が窺える。同様に、北東中央部においても複数の形態が存在しているが、A-I-a類を描出すると同じ傾向が認められる。さらに、北東中央部では、A-II-b₂類に属する土壌を中心として存在しているが、これについても重複をくり返しながらも同一の方向性が守られていることが窺える。

すなわち、このことは、ある一定の空間内に土壌を形成する過程において、重複の有無は別問題として、決められた空間に意図的に配置されていると考えられよう。

なお、これら土壌群が指す北東方向の延長上には、近世初期に建立された景徳院の山号にも称されている天童山がそびえ立っており、長軸の方向と何らかの関連があることは、十分に予想されうるところである。

5. 伴出遺物

遺構の大半を調査区域外にもつ4基の土壌を除く37基の土壌から検出された遺物は、表-6、表-7のとおり、土器片（灰釉陶器片を含む）と小砾である。

土器片は、いずれも細片であり、礫は、5cm未満の小砾である。その意味では、土壌の構築時期を正確に決定しうるものではない。しかし、後述する如く土壌の覆土を検討すると、人為的に埋戻された可能性がきわめて高い。さらに、覆土は十層図（第28～37図）でも明らかのように、土壌構築時期と同一のものであり、その意味では、たとえ細片であるにしても土壌の構築時期を考

表-6 土壌内出土遺物件数状況

項目	形態	有・無	伴出土壌 (基)	総数 (基)
土器 (灰釉陶 器を含む)	A	有	24	31
		無	7	
	B	有	2	6
		無	4	
礫	A	有	29	31
		無	2	
	B	有	4	6
		無	2	

表-7 器種別にみた伴出遺物

器種	伴出土壌 (基)	備考
甕	17	—
壺	16	—
皿	2	第4・29号土壌出土
羽釜	3	第4・24・28号土壌出土
灰釉陶器	9	第4・12・13・14・15・22・29・30・36号土壌出土
不明	2	—

える上で重要な参考資料といえる。

土壌内より検出された土器片は、A類・B類を問わず26基から認められる。これを表-1・表-7に照合すると、伴出した土器の一部には、縄文式土器片が認められるが、9割以上は平安時代に比定される土師器片(変形土器・壺形土器・皿形土器・羽釜)および灰釉陶器片である。(註1)

土壌間において重複関係が認められることから、土壌の形成段階では、ある一定の時間が存在するものの、この伴出遺物を見る限りにおいては、大半の土壌に同一包含層中の遺物が伴出しており土壌の構築時期を考えた場合、きわめて近接した時間内に形成されたことを示唆している。

また、土壌内からは、土器片とともに小礫が検出されているが、ローム層中にも花崗岩が入りこんでいることから、この地帯一帯は礫の多いところであり、しかも、これらは加工礫でないところから人為的に入れられたものではなく、自然に入りこんだものとみる方が妥当といえよう。

註

1. 土師器および灰釉陶器片は、相対年代より、甲斐編年に照合すると、おおむねX・Ⅲ期に比定される。(絶対年代では10世紀後半に比定される)

坂本英火・末木健・堀内真「甲斐地域」『シンポジウム 東京・平安時代土器の諸問題—相模国と周辺地域の様相—第Ⅱ版』神奈川考古・第14号 1983年

6. 土 層

土壌の機能を考える上で、重要な要素の一つとなるのが覆土である。すなわち、土壌の覆土が、自然堆積土であるか、あるいは人為的埋戻土であるかによって土壌の機能にも差違が認められる。

今回検出された土壌は、後世の擾乱が著しい調査区域内の北側に位置している。そのため、土層の判断は困難を窺めるが、つぎの二点から検討を加えることにする。

第1は、比較的遺存状態の良好な第13号土壌の堆積土をみると、底より約50cm上位には、砂質のローム層が約10cmの厚さでほぼ水平に堆積しているのが認められる。これは、明らかに自然

堆積土ではなく、人為的埋土であることを示唆している。同様に、水平堆積層は、ベースとなる土壌の色調（後述する土壌は暗褐色土）が異なるものの、砂質の地山層を含んでいるという点でB類に属する第57号土壌にも認められる。また、これらの水平堆積層下には、暗褐色土が堆積している。作図中は、この土層を分層したが、後日、整理の際に検討を加えた結果、堆積土は、粒子が荒く、しかもやわらかいことからして上層と同様に埋戻しされた可能性がきわめて高いものと推察される。

第2は、上記の2基を除く残りの土壌について覆土をみると、上述した明確な人為的埋土（地山など）は認められず、その下に堆積している土層と同じ、粒子の荒い、やわらかな暗褐色土が検出されている。これらの土壌は、今日でこそ後世の攪乱により造構の上位を消失したために、人為的埋土は存在していないが、覆土を検討する限りでは、当初は存在していたことが十分予想される。

以上の二点から、土壌の覆土が「人為的埋土である」という根拠としては、いささか不十分であるかもしれないが、総体的にみるならば、やはり、自然堆積土というよりはむしろ人為的埋土と理解できよう。さらに、この場合、覆土中には腐植土などの自然堆積土が認められないことから帰納して、きわめて短期間のうちに埋戻し行為が行なわれたことが推察できる。

7. 形成過程

田野平遺跡からは、前述したように矩形を呈するA類型に属する土壌と円形を呈するB類型に属する土壌とが検出されている。

そこで、ここでは形態別にみた土壌の重複関係から形成過程の一端をとらえることにする。

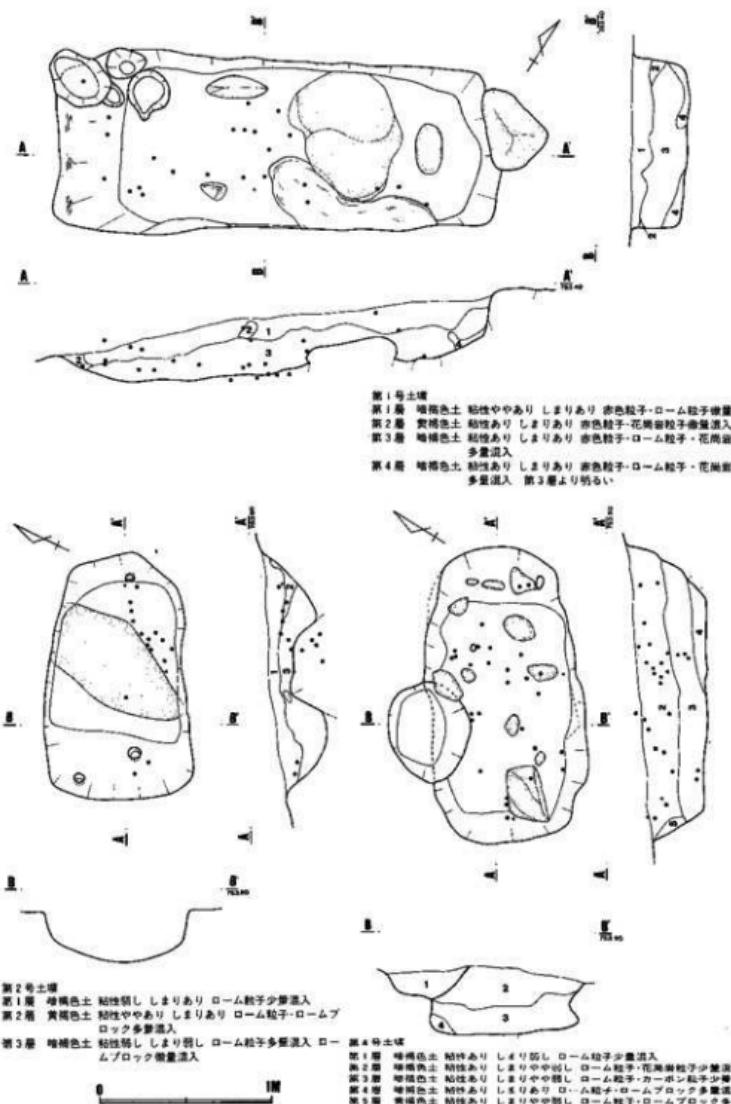
はじめに、A類型に属する土壌とB類型に属する土壌との関係をみると、遺物では、表一、表一七で明らかのように、両者ともに伴出遺物は土師器片（ほぼ同一時期）と同じであり、この点ではさほどの時間差は感じられない。他方、両土壌間の重複では、第36号土壌と第57号土壌、第19・21・22・27号土壌と第56号土壌との2箇所において認められ、いずれもB類型の土壌の方がA類型の土壌よりも古いことが明らかとなっている。

矩形土壌の中には、様々な形態の土壌が存在しており、しかも、ある一定の期間にわたり形成されていることから一概に円形土壌の方が古いとは断言しがたいが、新旧関係、分布状況等からみた場合には、やはり円形土壌の方が古い様相を呈しているといえよう。

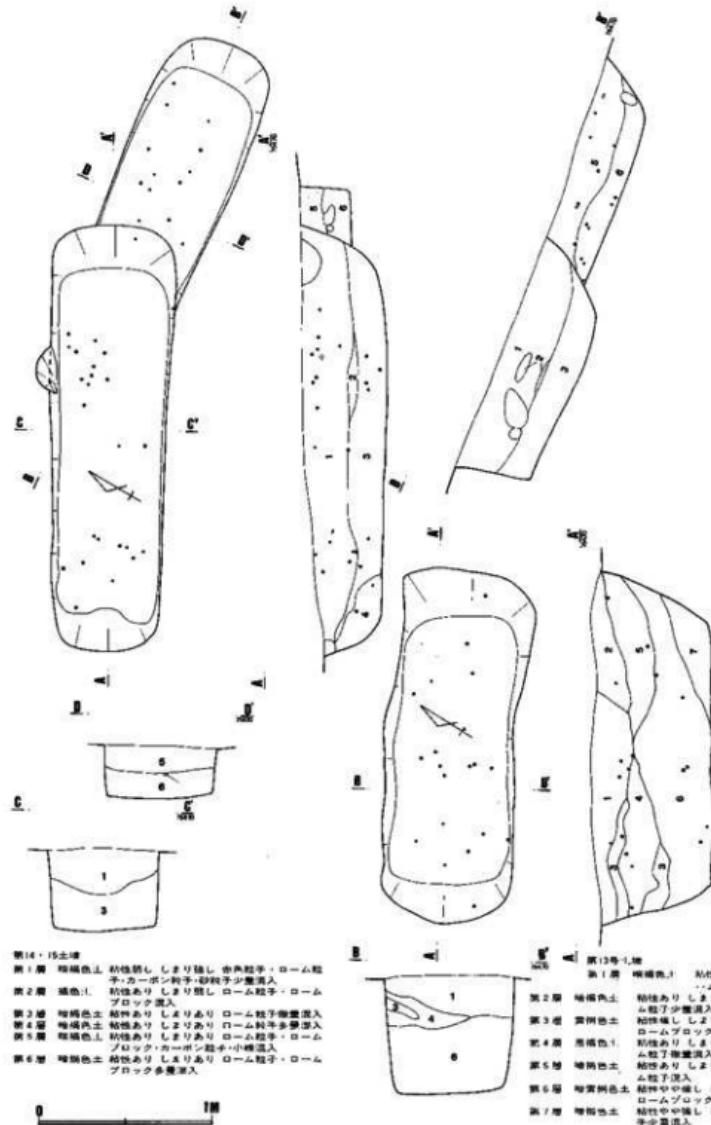
つぎに、矩形土壌についてみると、調査区域内からは3箇所の集中区域が認められる。各々の形態間における変遷過程、ひいては集中区域間における時間差等は判然としないが、個々の集中区域における土壌の在り方をみると、土壌間における重複関係から新しいものほど東側につくられており、同時に、その方向性は、より南一北を指す傾向にあるといえよう。その意味では、第5・21号土壌は、新旧関係においては新しく、方向は西一東を指すことで前述した土壌群とは若干異なっており、幾分新しい時期に形成されたものであろうことが推察される。（野中和夫）

表 1 平安時代古墳一覧表

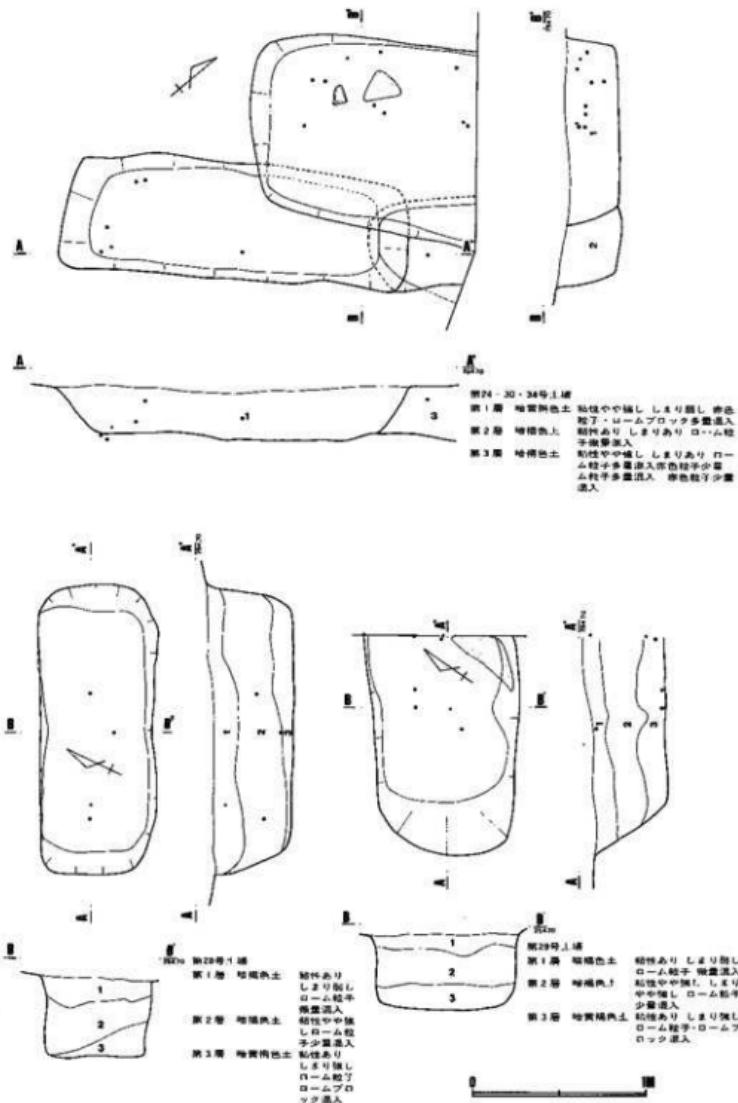
土壙番号	平面形態	床面標高 (単位:m)	断面形 級	長軸方位	規 模(単位:m)			伴 山 遺 物	重 複 関 係	備 考
					上	下	深			
1 A - I - a	752.90	11	11	N - 62° E	252 × 116	207 × 94	34	壺 1	壺 26	
2 A - I - c	753.35	11	11	N - 65° E	142 × 80	88 × 70	30	壺 1 瓢文 3	壺 15	壇底に小ピット 3 本有
3 A - II - b2	754.26	11	11	N - 63° E	145 × 68	130 × 62	25	壺 1	壺 7	第 36 号土壙より古
4 A - I - b1	753.30	11	11	N - 60° E	171 × 87	120 × 74	38	羽釜 1 盆 1 灰釉陶器 1	壺 26	壇底に小ピット 5 本有
5 A - II - a	753.44	11	11	N - 60° W	140 × 65	115 × 58	61		壺 4	
6 A - I - b2	753.61	11	11	N - 50° E	155 × 90	130 × 35	37		壺 1	第 7 号土壙と接する(新旧不明)
7 A - II - b2	753.66	11	11	N - 55° E	127 × 65	103 × 45	17		壺 3	第 8 号上壙より新
8 A - II - b2	753.54	11	11	N - 79° E	230 × 90	175 × 56	61	壺 2 壺 1	壺 3	第 7 + 9 + 10 号土壙より古
9 A - I - c	753.48	11	11	N - 63° E	180 × 120	143 × 98	31	环 4 瓢文 1 不明 1	壺 11	第 8 号土壙より新, 第 10-11-12 号土壙より古
10 A - I - a	753.78	11	11	N - 80° E	195 × 90	175 × 75	39	壺 1	壺 6	第 8 + 9 + 12 号上壙より新
11 A - II - b2	753.56	11	11	N - 66° E	201 × 76	185 × 64	20		壺 1	第 9 号上壙より新, 第 12 号土壙より古
12 A - II - b2	753.56	11	11	N - 62° E	185 × 85	150 × 65	36	壺 1 壺 2 灰釉陶器 1	壺 8	第 9-11 号土壙より新, 第 10 号土壙より古
13 A - I - b1	753.91	11	11	N - 63° E	204 × 74	155 × 65	70	壺 2 壺 1 灰釉陶器 1	壺 13 刻片 1	人為的埋廻し層(第 3 層・黄褐色上)
14 A - I - b1	754.00	11	11	N - 57° E	245 × 65	196 × 57	46	壺 2 壺 5 灰釉陶器 1 不明 1	壺 15	第 15 号土壙より新
15 A - I - b1	754.22	11	11	N - 78° E	225 × 65	180 × 61	34	壺 1 壺 4 灰釉陶器 1	壺 7	第 14 号土壙より古
17 A - I - b1	754.10	11	11	N - 63° E	211 × 70	181 × 62	36	壺 2	壺 13	
18 A - I - b2	753.40	11	11	N - 72° E	173 × 63	142 × 55	28		壺 6	南東を窓穴に切られている
19 A - I - b2	754.20	11	11	N - 57° E	166 × 95	133 × 84	30	壺 2 壺 2 瓢文 1	壺 15	第 56 号土壙より古, 第 21 号土壙より古
20 A - I - a	754.08	11	11	N - 76° E	189 × 95	179 × 88	50	壺 2 壺 2 瓢文 4	壺 3	第 37 号土壙より古
21 A - I - a	753.72	11	11	N - 38° W	145 × 75	120 × 57	86	瓢文 1	壺 13	第 19 + 22 + 56 号土壙より新
22 A - I - a	754.35	11	11	N - 63° E	175 × 78	158 × 68	14	环 1 灰釉陶器 1	壺 7	第 21 号土壙より古
23 A - I - b2	754.35	11	11	N - 62° E	229 × 90	208 × 72	17	壺 7 3 环 2	壺 23	
24 A - I - b1	754.23	11	11	N - 59° E	200 × 66	165 × 56	28	剥片 1	壺 4 刻片 1	第 30 号土壙より古
25 A - I - a	754.43	11	11	N - 45° E	195 × 85	175 × 75	75	壺 10 壺 2 环 12	壺 7	第 27 号土壙より新, 第 38 号土壙より古
27 A - I - a	754.48	11	11	N - 71° E	195 × 65	172 × 50	35	壺 2 小形壺 1	壺 1	第 56 号土壙より新, 第 25 号土壙より古
28 A - I - b2	754.14	11	11	N - 64° E	167 × 63	138 × 55	45	羽釜 1	壺 3	
29 A - I - b1	754.29	11	11	N - 43° E	133+4×86	95+4×70	46	壺 1 盆 1 灰釉陶器 1	壺 4	
30 A - I - a	754.27	11	11	N - 59° E	132+4×110	120+4×100	30	壺 1 灰釉陶器 1	壺 9	第 24 + 34 号上壙より新
34		754.30			(60)	(55)	27			第 30 号土壙より古
35 A - I - a	754.45	11	11	N - 63° E	130+4×88	124+4×60	18			
36 A - I - a	754.20	11	11	N - 65° E	171+4×65	168+4×58	55	壺 1 灰釉陶器 1		第 3 + 57 号土壙より新
37 A - I - a	754.13	11	11	N - 53° E	180 × 75	165 × 66	43	壺 1 瓢文 2 不明 1	壺 3	第 20 号土壙より新
38		754.59				75	60			第 25 号土壙より新
39		754.52				82	70			
40					48	20	15			
51 B - a		753.00	11		100	90	18	壺 1	壺 6	壇底に小ピット 6 本有
52 B - a		753.29	11		95 × 92	78 × 74	24		壺 3	
53 B - a		754.06	11		135 × 120	130 × 115	23			
54 B - a		754.20	11		95	91	20	壺 1 壺 4 瓢文 2	壺 7	第 19 + 21 + 22 + 27 号土壙より古
55 B - b2		754.11	11		115	105	43			第 36 号上壙より古
57 B - a		754.28	11		() × 133	() × 123	45	壺 4		第 2 層は人為的埋廻し層?



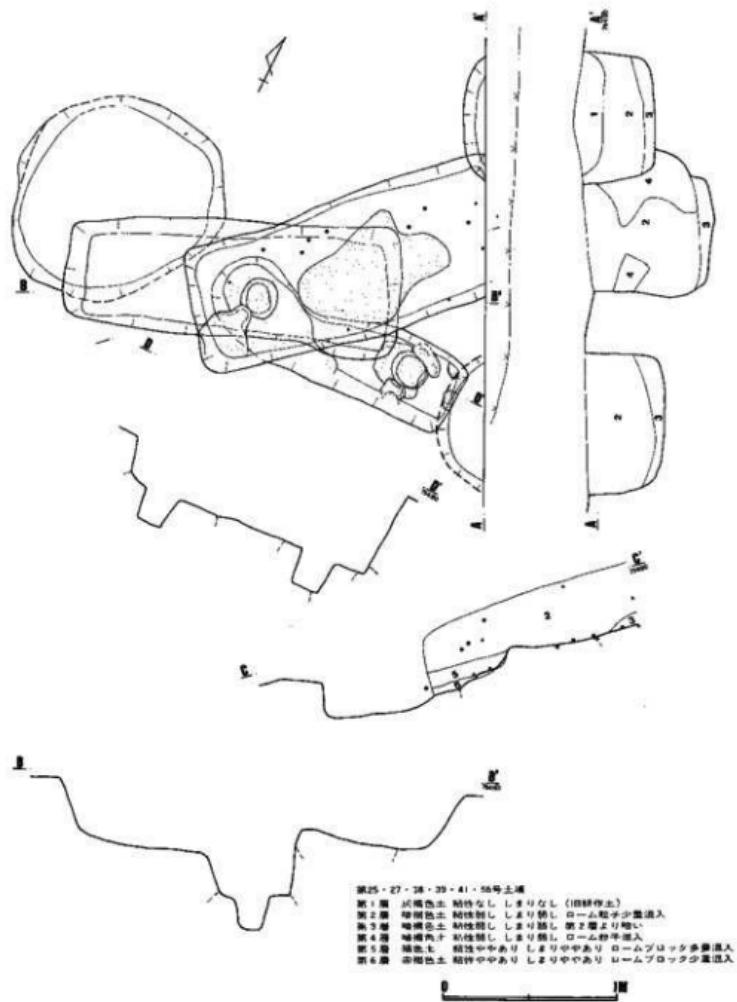
第28図 第1・2・4号土壠平面図・断面図及び土壠断面図

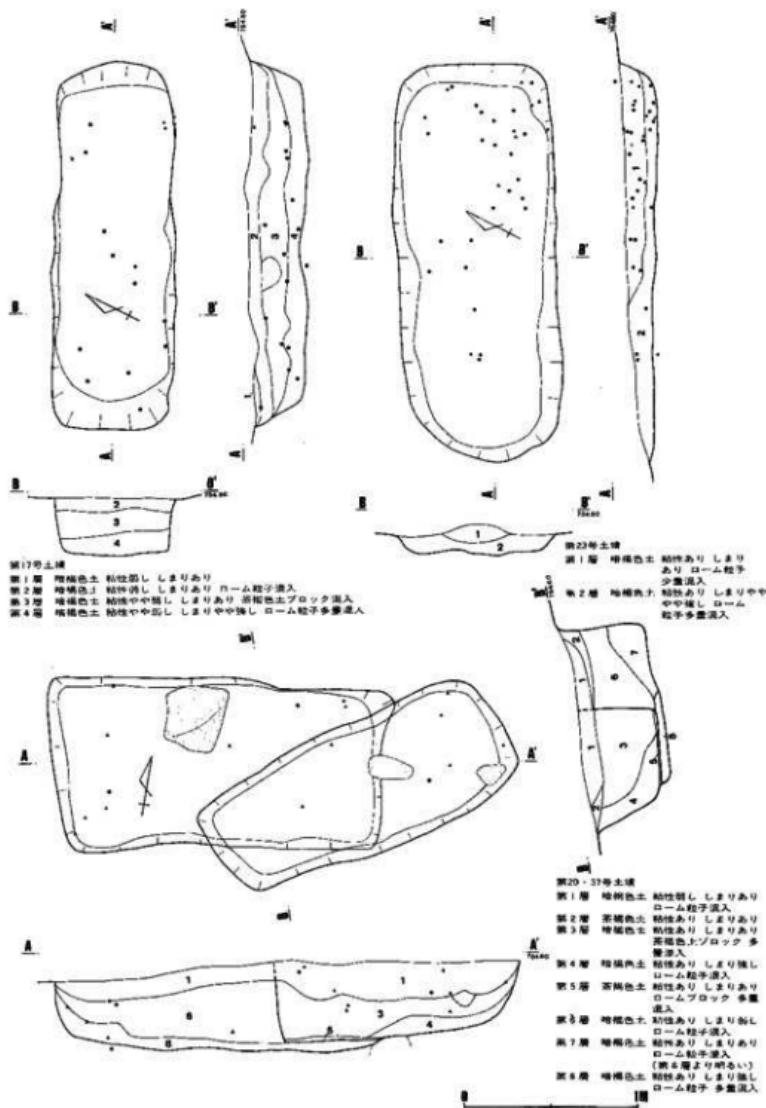


第29図 第13・14・15号土壤平面図及び土壌断面図

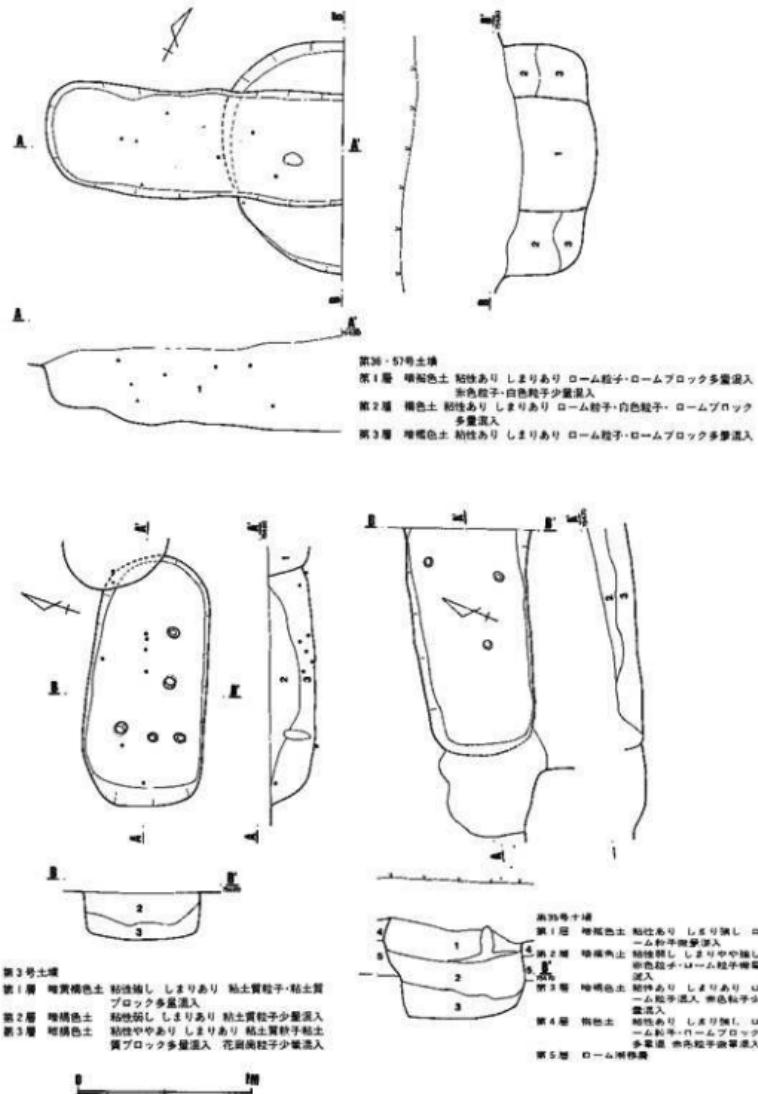


第30図 第24・28・29・30・34号土壇平面図及び土層断面図

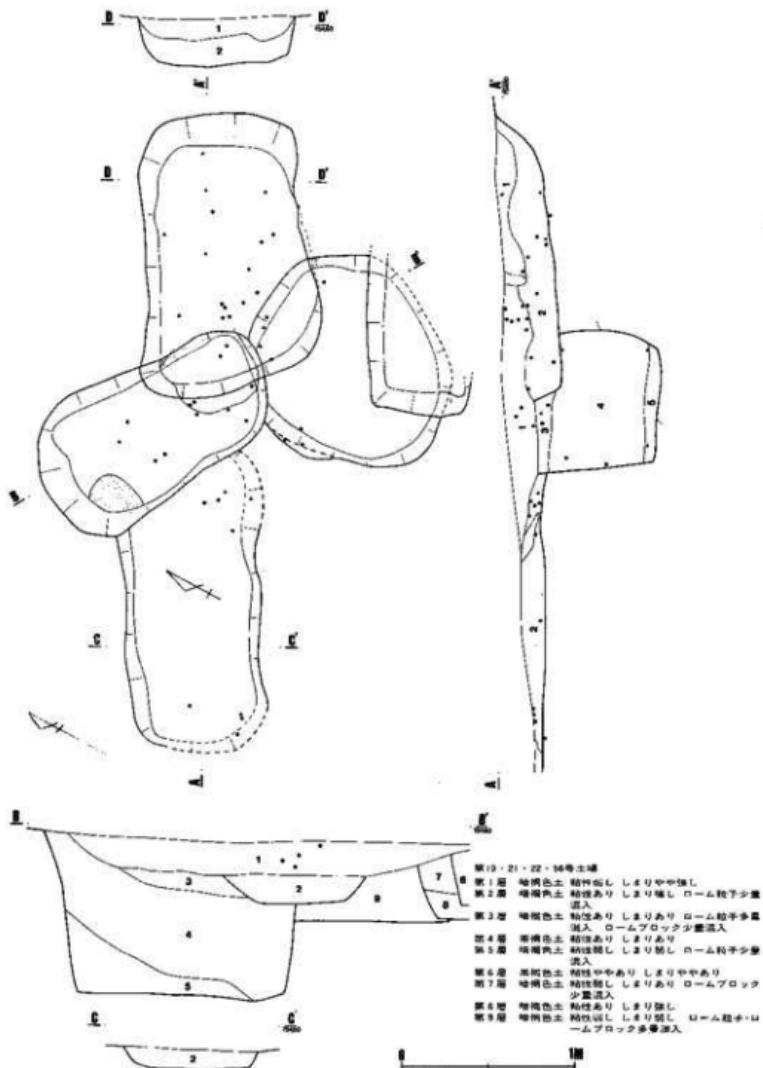




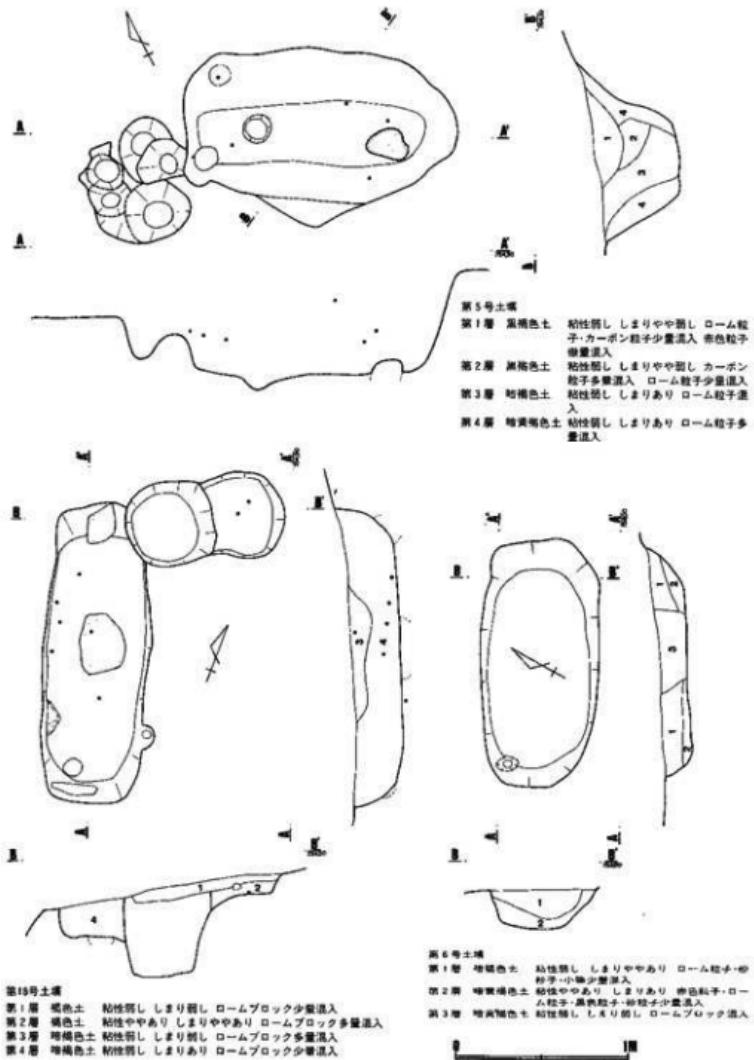
第32図 第17・20・23・37号土壤平面図及び土層断面図



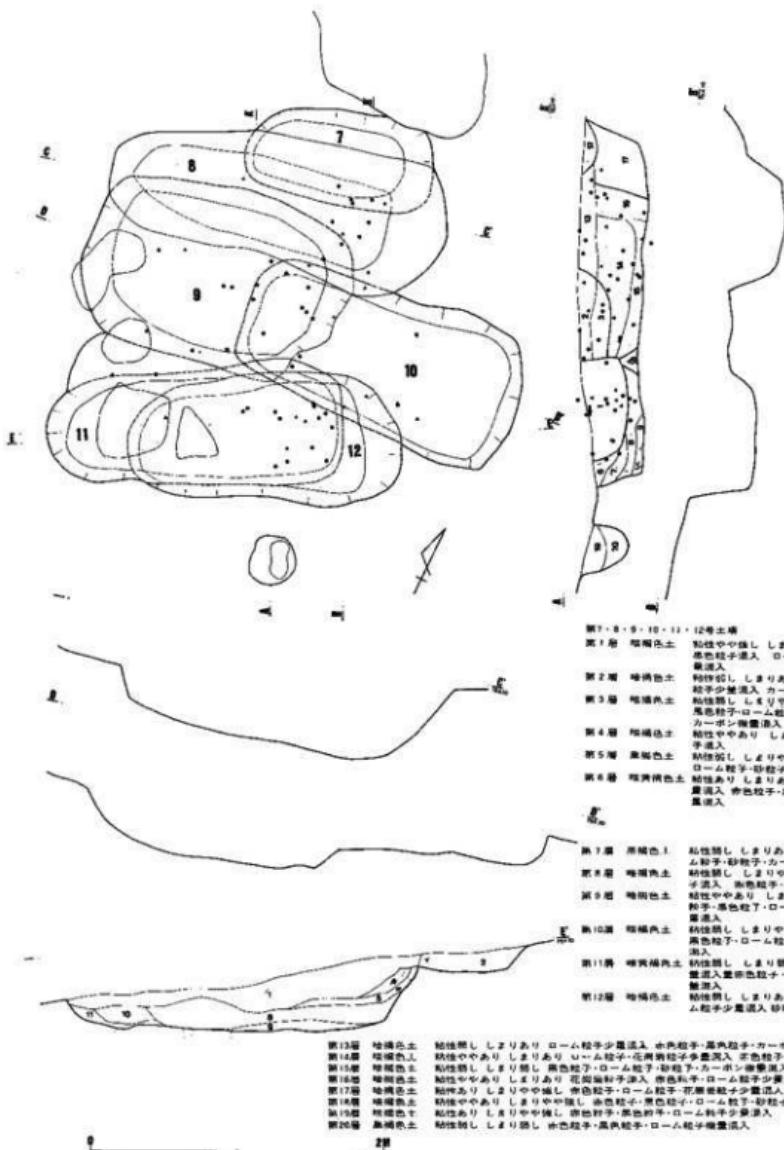
第33図 第3・35・36・57号土場平面図及び土層断面図



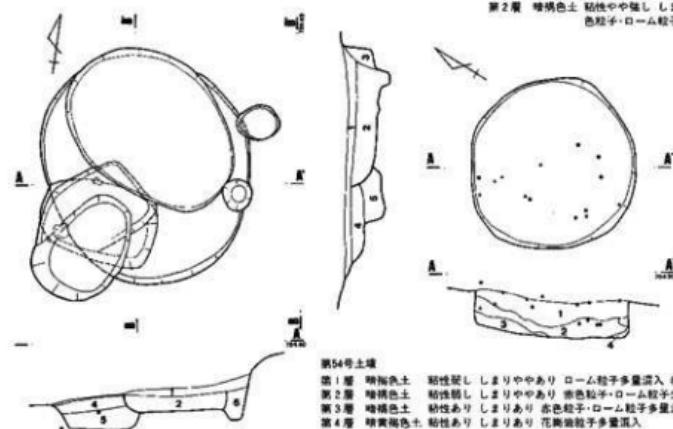
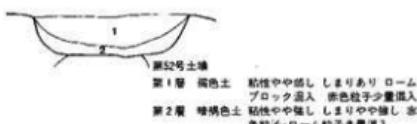
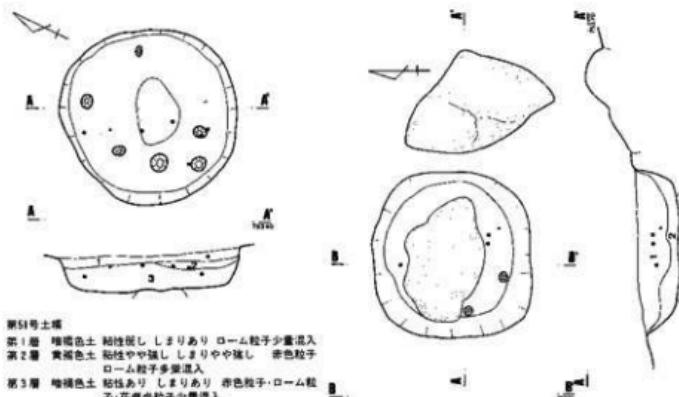
第34図 第19・21・22・56号土壤平面図及び十層断面図



第35図 第5・6・18号土壤平面図及び土層断面図



第36図 第7・8・9・10・11・12号土壌平面図・断面図及び土層断面図



第53号土壤

第1層 棕色土 粘性なし しまりなし ローム粒子・花崗岩粒子少量混入

第2層 單褐色土 粘性弱し しまりややあり ロームブロック少量混入

第3層 單褐色土 粘性弱し しまりややあり (やや熱を受けたものと思われる)

第4層 棕色土 粘性弱し しまりあり ローム粒子・花崗岩粒子混入

第5層 棕色土 粘性あり しまりあり ローム粒子少量混入

第6層 棕色土 粘性あり しまりあり ローム粒子少量混入

第37図 第51・52・53・54号土壤平面図及び土壤断面図

第3節 集石土壙

本調査区域内からは、2基の集石土壙が検出されている。

1. 第1号集石土壙（第38図）

本土壙は、調査区域の北側中央部、第2号住居址の南側に隣接して位置している。平面形は、北側の一部が後世の擾乱を受けて消失しているが、おおむね梢円形を呈しており、その規模は、長径約70cm、短径約60cm、深さ約25cmを計測する。

壙底は、若干の起伏が認められるもののほぼ平坦である。壁は、垂直に立ち上がり、そのため断面形は、「凹」形を呈している。

壙内には、上位に直径約20~30cmの比較的大形の角礫が、壁に沿って三方に配されており、下位に較大の角礫が、大形の礫との間に挟まれて集中して検出されている。

なお、本造構の時期を決定しうる土器片等は検出されていない。

2. 第2号集石土壙（第38図）

本土壙は、調査区域の北西端部、第1号土壙の北西隅に隣接して位置している。平面形は、円形を呈しており、その規模は、直径約65cm、深さ約25cmを計測する。

壙底は、平坦であり、壁は、緩やかに立ちあがるために、その断面形は、すり鉢形を呈している。なお、壙底の西側では、地山中に存在する花崗岩を整形して構築している。

壙内には、主に南側を中心として、直径約5cm程の小礫が検出されている。

なお、覆土中からは、土師器の細片が2点検出されている。

(和氣節子)

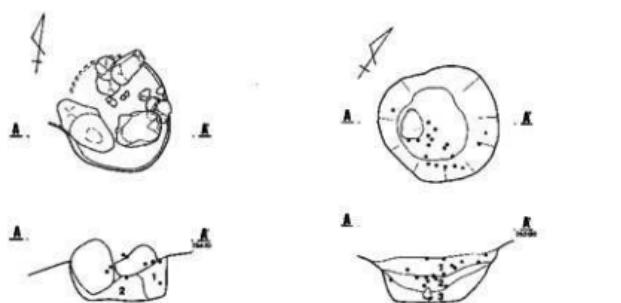
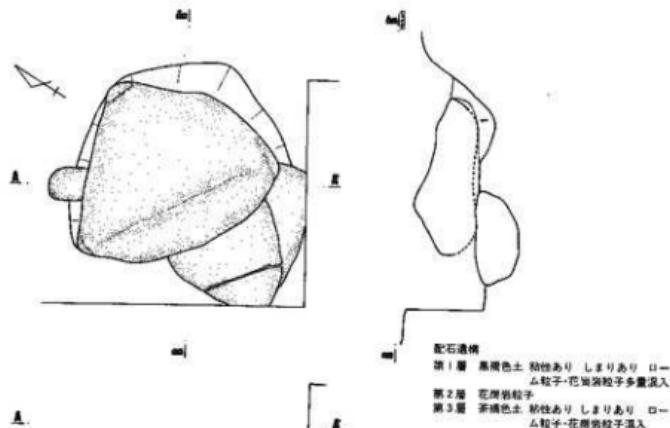
第4節 配石造構

本造構は、調査区域内のうち北西隅に位置している。

緩斜面上に位置するために、西側では消失しているが、北側には、皿状を呈する浅い掘り込みが認められる。

配石は、地山中に存在する自然石（花崗岩）の上に、大形の花崗岩3枚を用いて構築されている。

(野中和夫)



第38図 第1号配石造橋、第1・2号集石土場平面図及び土層断面図

第8章 近世以降の遺構

本調査区域内からは、磁器片（江戸時代以降に比定される）が耕作土に混入し数点検出されている。同時に、平安時代に比定される土壙とは覆土の異なった土壙が存在しており、これが、最も新しい時期に形成されたであろうことは、伴出遺物からも容易に想像されるところである。

第1節 土 壙

当時代に比定される土壙としては、第16・26・31号土壙の3基がある。

1. 第16号土壙（第39図）

本土壙は、調査区域の北西端部に位置しており、平面形が長辯円形を呈している。その規模は、長径約135cm、短径約80cm、深さ約50cmを計測する。長軸方位は、N-14°-Wを指している。

壙底は、およそ平坦であり、側壁は、壙底からの立ちあがり部分では丸味を帯び、そこからほぼ垂直に延びている。そのため、断面形は、横広の「U」字形を呈している。

遺物は、小砾が6点検出されている。

2. 第26号土壙（第39図）

本土壙は、調査区域の北側、歴史時代に比定される3箇所の土壙集中区域の中間に位置している。平面形は、隅丸長方形を呈しており、その規模は、長径約160cm、短径約95cm、深さ約30cmを計測する。長軸方位は、N-54°-Wを指している。

壙底は平緩で、壁は垂直に立ちあがっている。

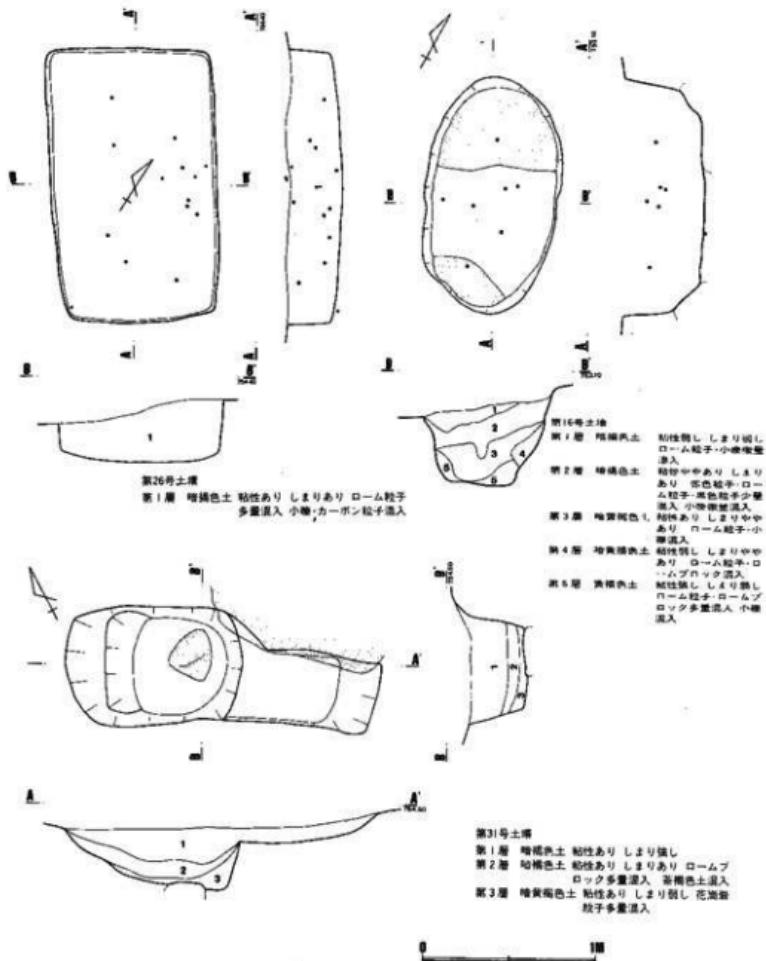
遺物は、磁器片が1点検出されており、それとともに縄文式土器片と土師器片も混在して伴出している。

3. 第31号土壙（第39図）

本土壙は、調査区域の東側中央部、第23号土壙の南側約1.0mの地点に位置している。平面形は、隅丸長方形を呈しており、その規模は、長径約95cm、短径約65cm、深さ約35cmを計測する。長軸方位は、N-62°-Wを指している。

壙底は、西側の方が深い、所謂、スプーン形を呈しており、そのために孤状を呈している。壁も同様に緩やかに立ちあがっている。遺物は、何ら検出されていない。

（野中和夫）



第39図 第16・26・31号土壠平面図及び土層断面図

第9章 結語—調査の成果と課題

第1節 先土器時代

本遺跡では先土器時代の遺構は発見されなかつたが、彼等が使用したであろう石器の断片、すなわち本体である石器をつくるために打ち欠かれた石屑が9点発見されている。このことは田野平遺跡付近に彼らの生活した跡が存在することを意味しており、約1～2万年前にこの大和村に人間が生活していた事實を証明する貴重な遺跡の一つといえる。

第2節 繩文式時代

本遺跡において数少ないながらも縄文式時代の土器や石器が出土している。これらは早期（戸上層・茅山）、前期（諸磯A・B・C・十三苦提）、中期（五領ヶ台・勝坂・曾利・加曾利E）、後期（堀之内・加曾利B）の長い期間にわたるものであり、特に中期後半のものが多く出土している。土器型式でいえば曾利III式以降のものが多いが、その終末期では渦巻文系統ではなく、加曾利E式的なモチーフである懸垂文を主体とした土器群にかわる。この傾向は次の後期前半にもうけつがれる。

遺構では、生活址といえる住居や墓地は発見できなかつたが、動物などをとる落し穴状の土壙が飛び道具である石鏃などとともに検出されているにすぎない。

しかし、日川にのぞむ緩斜面の果樹園や畠地からは多くの土器類が採集されており、本遺跡は大和村において最も縄文人が生活するのに適した場所であり、本調査区域近くに必ず住居址が存在するはずである。

第3節 平安時代

本遺跡からは、平安時代の生活址として堅穴住居址、土壙、集石土壙、配石遺構が検出されており、生活用具として土師器片、灰釉陶器片が検出されている。

個々の遺構・遺物については、第7章で詳細に記載したので、ここでは若干の考察と問題点とを指摘することにする。

A. 堅穴住居址

本遺跡からは、4軒の堅穴住居址を検出することができた。このうち、第3号住居址は、柱穴より復原されたものであり、他の堅穴住居址では柱穴が検出されていないことから推察すると構造的に異なり、その点では構築時期に差違があるものであるのかもしれない。

第3号住居址を除く3軒の住居址について概観すると、つぎのことを指摘することができる。

第一は、造構の配置をみると、居住空間としての堅穴住居址は、墓域としての土壙群とは狭い空間ながら各々別個の空間を有して構築されていることである。このうち、堅穴住居址は、調査地内のうち南・西側の微傾斜地に位置しており、当時の集落を復原するならば、おそらく堅穴住居址群は、今日、建立されている景德院境内に統一していたであろうことが推察される。

第二は、形態・規模において極めて類似していることである。いずれも平面形は、隅丸矩形を呈しており、その規模は、1辺約3～4m、床面積およそ10～12m²を計測し、比較的小型のものである。カマドは、東壁の南側に付設されており、煙道部の一部は、壁の外側に突出している。カマドの構造をみると、袖部に掘り方を設け、その芯となる部分に抽石を用いていることを共通の特徴としている。このカマドに石材を用いることは、甲斐地方における全般的な特徴でもあり、これらは豊富な石材が近隣に存在することによる所以であろう(註1)。

第三は、第1号住居址、第2号住居址から、所謂、床下土壙と呼称される造構が検出されていることである。双方の土壙とも覆土には、人為的に灰層および焼土層がつめこまれておらず、この点から床下土壙とカマドとの関連性の強いことが容易に推察される。しかし、一方では、第1号住居址で明らかのように、床下土壙の上面は、薄い粘土層によってよく踏み締められた貼床が施されている。すなわち、堅穴住居址が存続する過程において、床下土壙は、恒久的な施設として付設されたものではなく、ある一時的な施設として付設されたものであることが考えられよう。この床下土壙の機能・性格については、今後の課題として別の機会にゆだねることにしたい。

第四は、3軒の住居址とも火災に遭遇していることである。その原因については、延焼によるものか、あるいは、個別による人為的放火によるものかは検出された造構からだけでは判然とはしない。しかし、このことは、今後、田野平遺跡(未調査部分も含める)の平安時代の集落を復原する際に、個々の造構・遺物、造構配置等とともに貴重な資料となりうるであろう。

第五は、第1号住居址床面直上より整然と並んで花崗岩が検出されていることである。詳細については、第7章第1節で報告したので、ここでは問題点をあげるにとどめたい。それは、この花崗岩が人為的に置かれたものか否かという点に集約される。これについて、当住居址が火災をうけているにもかかわらず、花崗岩と密着する床面および床面と密着する花崗岩の下面は、ほとんど焼けた痕跡が認められず、さらに、花崗岩の上面もさほど熱は受けていない。それに対して、花崗岩の側面の周囲は、よく焼けており赤化していることが窺える。すなわち、このことは、花崗岩は、火災をうける前一つまり居住していた当初一から配置されていたと考えるのが理当然であり、その位置から、柱の礎石として使用された可能性もあるといえよう。しかし、このような小規模な堅穴住居址に礎石を配するものは全国に例をみない。大型住居址で礎石を配するものも稀であり、甲斐地方では、高根町青木遺跡(註2)の一例を除いて他に類例は認められない。その点では、第1号住居址より検出された花崗岩については、資料の増加をまって慎重に検討を加える必要がある。

第六は、堅穴住居址の時期および集落構成についてのことである。前述したように、堅穴住居

址の形態・構造は、1軒を除いてきわめて類似しており、出土遺物は、次項で論じるが、この両者の検討から、その構築時期は若干異なるものの少なくとも3軒はほぼ同時に存在した可能性が極めて強く、その検査状況から判断すると2~3軒を単位とする数単位によって集落が構成されていたであろうことが推察できる。さらに、その構築時期は、およそ甲斐編年の中期から後期が考えられよう。

B. 遺 物

本遺跡からは、平安時代に比定される遺物として、土師器片と灰釉陶器片とが検出されている。

これらの遺物のうち大半は、堅穴住居址より検出されたものであり、詳細は第7章第1節で報告してあるので、ここでは遺物についてその特徴をまとめるとともに若干の問題点を指摘することにする。

田野平遺跡より検出された土師器片を器種別にみると、壺形土器・皿形土器・甕形土器（含小形甕形土器）・羽釜がある。このうち、壺・皿形土器は、主として第1号住居址から検出されたものであり、器形・整形からみる特徴は、法量では口径>底径×2の範疇にはいり、口縁端部が玉縁を呈し、器面調整が斜め笠割りが施されていることを指摘することができる。すなわち、これを甲斐編年で照合すると中世後期に比定されるといえよう（註3）。甕形土器・羽釜は、器面・内面とも6~7条を1単位として丁寧に刷毛目調整が施されており、器形についてみると、甕形土器では、およそまっすぐ立ちあがる胴上部から肥厚して大きく外反する口縁部を呈しており、壺・皿形土器と同様に同時期の特徴が顕著に観察できる。

しかし、第2号住居址より検出された甕形土器・羽釜は、胎土・器形において明らかに他の個体とは異なり、甲斐地方・駿東地方・関東地方では類例がみあたらず、今後の課題の一つといえよう。

つぎに、墨書き土器についてみると、第1号住居址より「五」の文字が施された墨書き土器が検出されている。甲斐地方でも、発掘調査が増大するとともに墨書き土器の事例も増大しており、今後、これらと比較検討を行わなければならないと考えられる。

最後に、もう一つの特徴として器面にヘラ記号が施されている土師器片（第19図13・一例は甕形土器）が存在することを付け加えるとともに、灰釉陶器片については全て細片で少量であることから、これについての検討は別の機会にゆだねることにする。

C. 土 壤

本遺跡からは、35基の矩形土壙とともに6基の円形土壙が検出されている。詳細については、第7章第2節で報告してあるので、ここでは主として上層の機能および集落における土壙の占める位置についてまとめるところとする。

はじめに、土壙の機能について述べると、結論的に言うならば、墓壙として使用されたと考えられる。

その根拠は、土壙群が堅穴住居址群とは別個の空間を占有しており、しかも、この土壙群は、ある一定の規則性のもとに構築され、同時にその覆土が人為的埋土と考えられることなどに起因する。

前述したように、田野平遺跡が位置する大和村は、代表的な山岳地帯の一農山村であり、必然的に居住地・耕作地等の立地は現在でも制約をうけている。これを田野平遺跡でみると、山裾は墓地として利用され、これより河川に延びる微傾斜地は居住地・耕作地として利用されていてることが推察できよう。類例は、東山梨郡三富村見畠遺跡においても認められる(註4)。同遺跡からは堅穴住居址が検出されなかったことから、報告者は土壙の機能については触れていないが、占地・形態よりも田野平遺跡と同様に墓地群としてとらえられるものである。

一方、上述した二遺跡がいずれも山間部に位置する遺跡であり、他方、同時代の平野部における事例についても考えねばなるまい。

甲府盆地において10世紀から11世紀に比定され、平野部に立地する遺跡には、東八代郡一宮町杭 N313 地点遺跡・杭 N319 地点遺跡(註5)、杭 N282 地点遺跡、杭 N280 地点遺跡、杭 N274 地点遺跡、杭 N269 地点遺跡、杭 N259 地点遺跡(註6)、杭 N396 地点遺跡(註7)、御坂町二宮遺跡(註8)、甲府市大坪遺跡(註9)、山梨市日下部遺跡(註10)、須玉町大豆生田遺跡(註11)、大泉村寺所遺跡(註12)、大泉村木ノ下・大坪遺跡(註13)、小瀬沢町前田遺跡(註14)、小瀬沢町・上平出遺跡(註15)、高根町青木遺跡(註16)等がある。

また、富士吉田市古屋敷遺跡(註17)においても同時代の遺構が報告されている。

これらの遺跡のうち、末報告の御坂町二宮遺跡・高根町青木遺跡を除く他の遺跡では、堅穴住居址・掘立柱建物址の報告はあるものの、同時代の土壙の報告はほとんどみあたらない。

すなわち、発掘調査が実施されるにあたり、調査面積、日程、経費等種々の制約にも一つの要因があるかもしれないが、土壙が検出されていないということは、むしろ、平野部では、堅穴住居址を中心とする居住空間と墓地群の墓域とは、ある一定の距離を置いて別個に構成されていたものと考えるのが適当ではなかろうか。

その意味では、田野平遺跡より土壙群が検出された意義は大きく、今後、平安時代の集落を解明する上で墓地と居住地との問題は大きな課題の一つであるといえよう。

D. 集石土壙・配石遺構

本遺跡からは、2基の集石土壙、1箇所の配石遺構が検出されているが、その機能・構築時期において判然としたものではなく、今後の課題といえる。

第4節 近世以降

本遺跡からは、3基の土壙が検出されているが、その構築時期は判然とはしていない。前述した平安時代の土壙とは覆土が異なり、より軟弱であることから新しいと考えられるものであり、今後類例を待つて検討する必要がある。

(竹石健二・深田大多郎・野中和夫)

註

1. 古墳時代後期より石組みのカマドがつくられており、例えば大月市南湖の内遺跡では、煙道部も石組みで構築されている。
2. 萩原三雄・末木 健「平安時代の坪庭と庶民の暮らし」『山梨の考古学』山梨日日新聞社 1983年
3. 板本美夫・末木 健・堀内 真「甲斐地域」『シンボジウム 奈良・平安時代土器の諸問題—相模国と周辺地域の様相—第Ⅱ報』神奈川考古・第14号 1983年
4. 日原春昭・他『見知道跡発掘調査報告書』三宮村教育委員会 1982年
5. 山本寿々雄・他『一勝沼バイパス道路建設に伴なう—古代甲斐國の考古学調査』山梨県教育委員会 1974年
6. 山本寿々雄・森本圭一・他『古代甲斐國の考古学調査(統編)』山梨県教育委員会 1975年
7. 山本寿々雄・山崎金夫・他『甲斐国埋没集落遺構等の調査』山梨県考古学会 1973年
8. 山梨県教育委員会文化課・末木 健氏の御教授による。
9. 末木 健・菊島美夫・山崎金夫『大坪』山梨県遺跡調査団 1976年
10. 小出義治・他「山梨県日下郡中学校寮落遺跡概報」「上代文化」19 1950年
11. 註2と同じ。
12. 註2と同じ。
13. 佐野勝広「木ノ下・大坪遺跡」大泉村教育委員会 1983年
14. 佐野勝広「前田」小瀧沢町教育委員会 1983年
15. 末木 健・他「上平出遺跡の概況」『山梨県中央造垣文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡小瀧沢町地内一』山梨県教育委員会 1974年
16. 山梨県考古学会『山梨県の遺跡』山梨日日新聞社 1983年
17. 奥 路行・堀内 真「古里敷遺跡」富士吉田市教育委員会 1983年

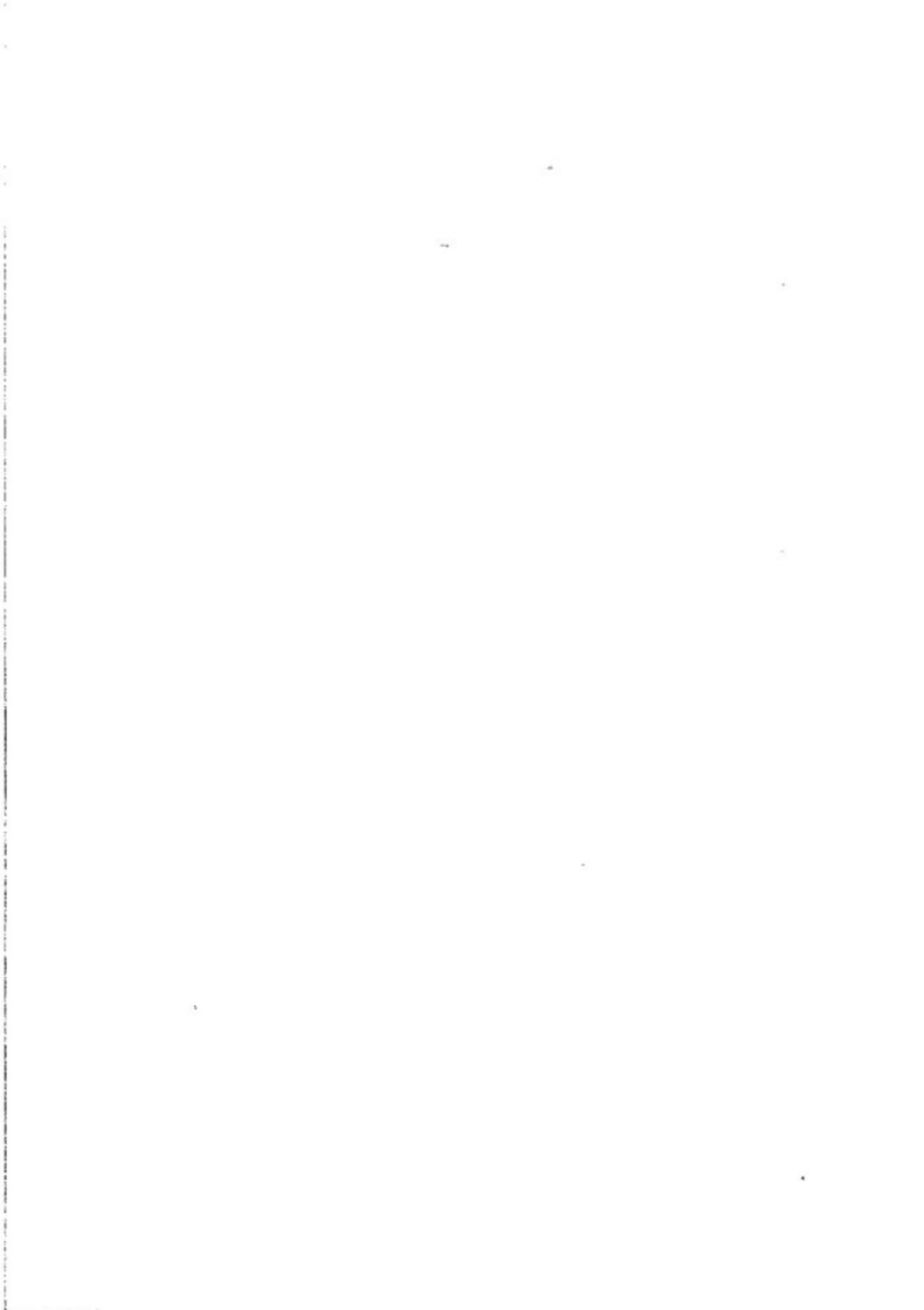


図 版

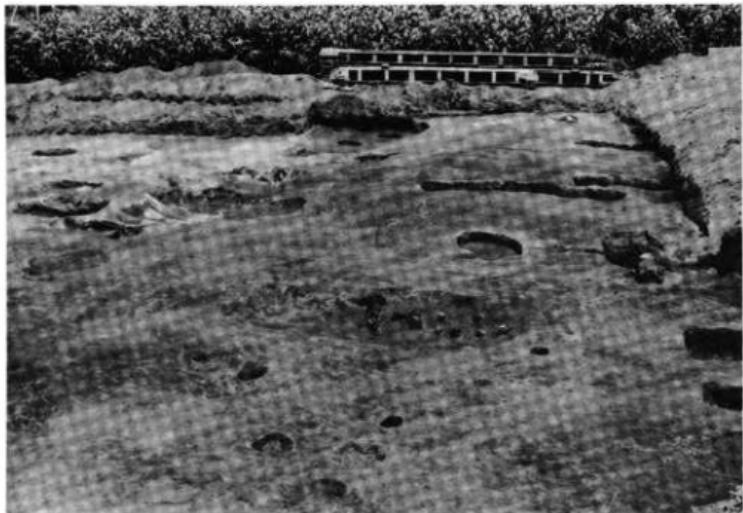
図版 1



1. 進路北側より天童山を望む（中央・天童山）



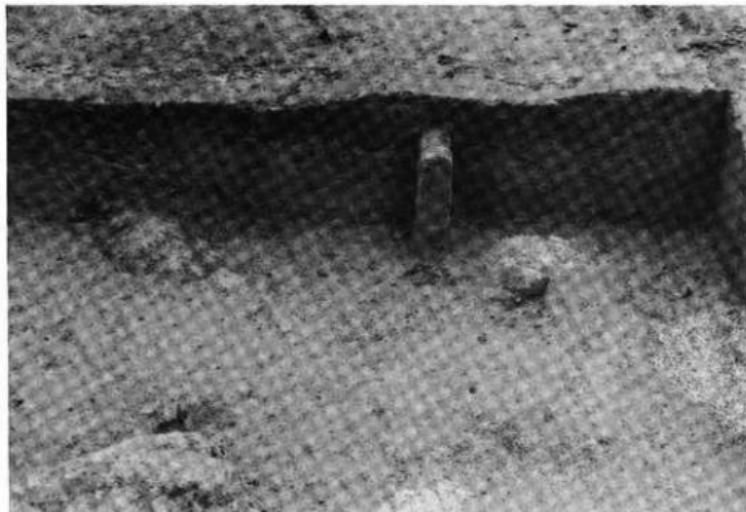
2. 調査開始時の進路近景



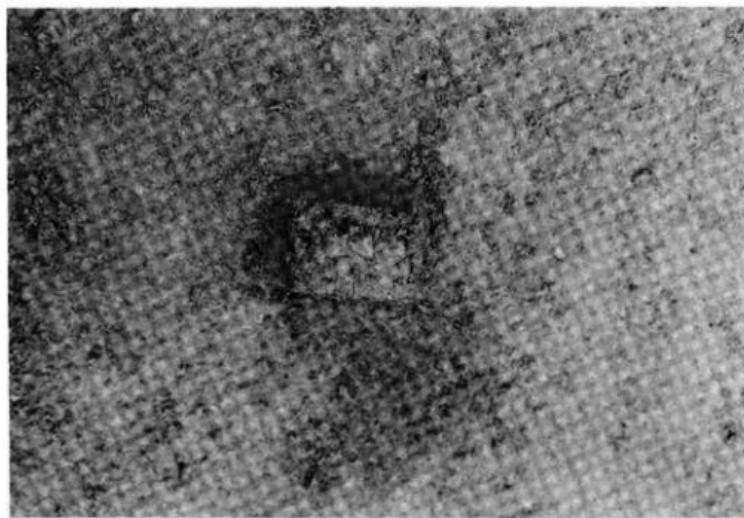
1. 調査地内北側造構完掘状況



2. 調査地内南側造構完掘状況



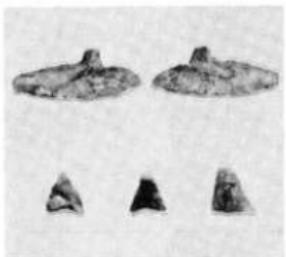
1. 先土器B区土層断面及び剥片出土状況



2. 先土器B区剥片出土状況



1. 第1号小堅穴遺物出土状態

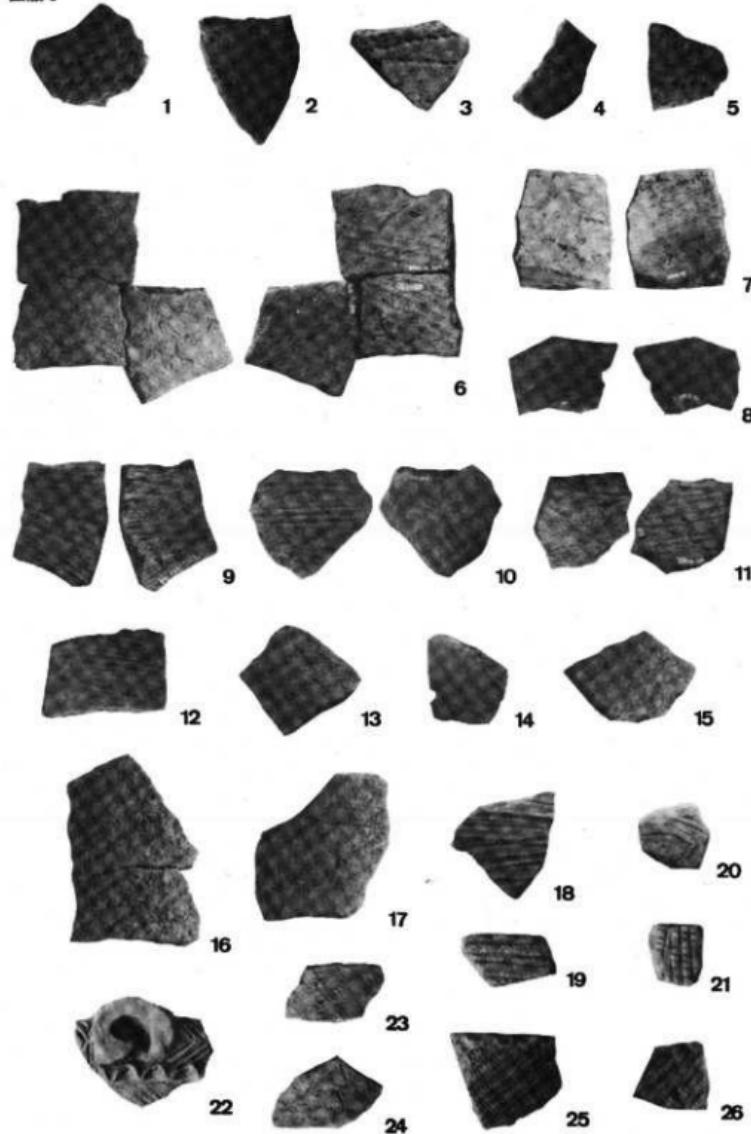


2. 繩文式時代の石器

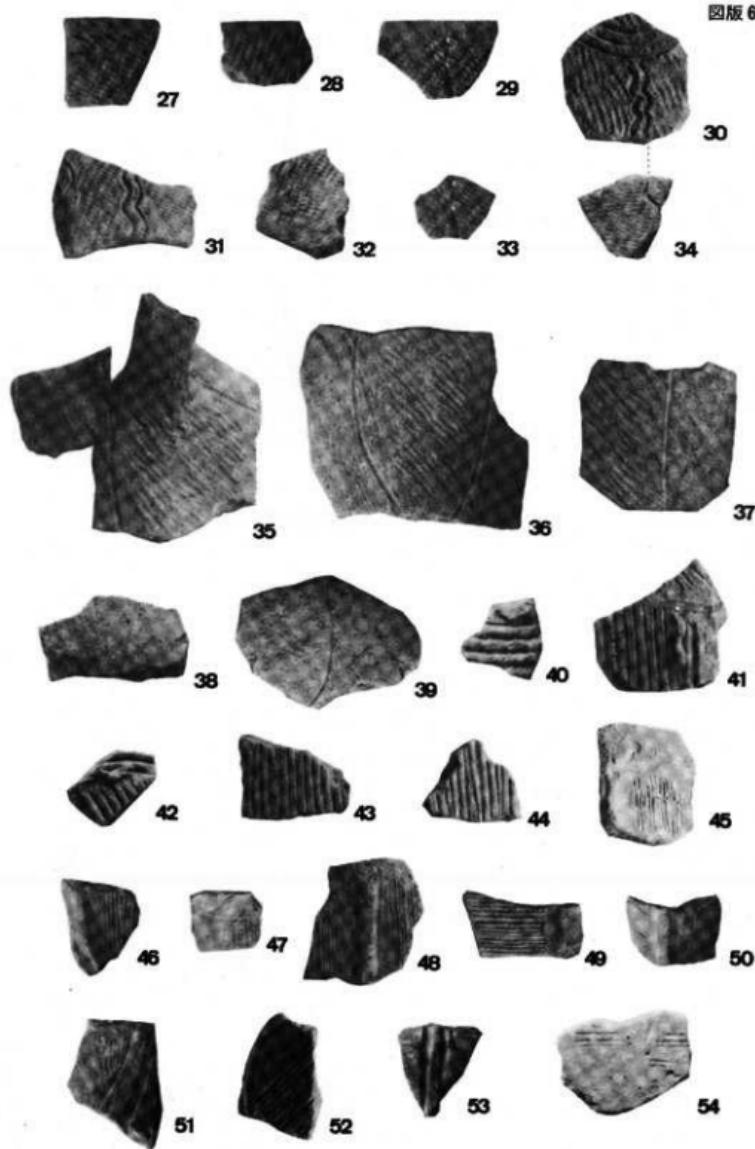


3. 第32号土坑完掘状況

図版 5

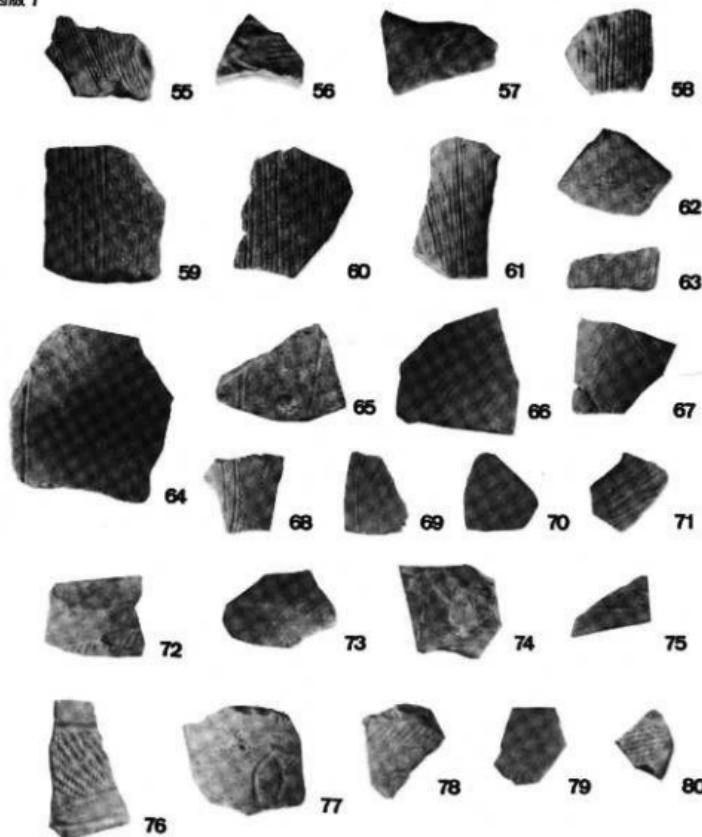


1. 造構外出土縄文式土器—その 1—(1 ~ 26)

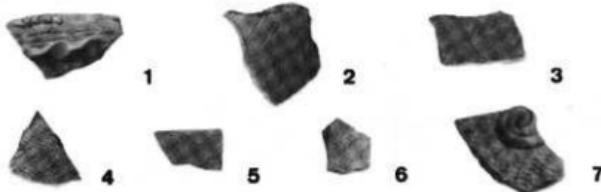


1. 造構外出土縄文式土器—その 2—(27~54)

図版 7



1. 遺構外出土縄文式土器 - その 3 - (55~80)



2. 遺構内出土縄文式土器 (1 ~ 7)

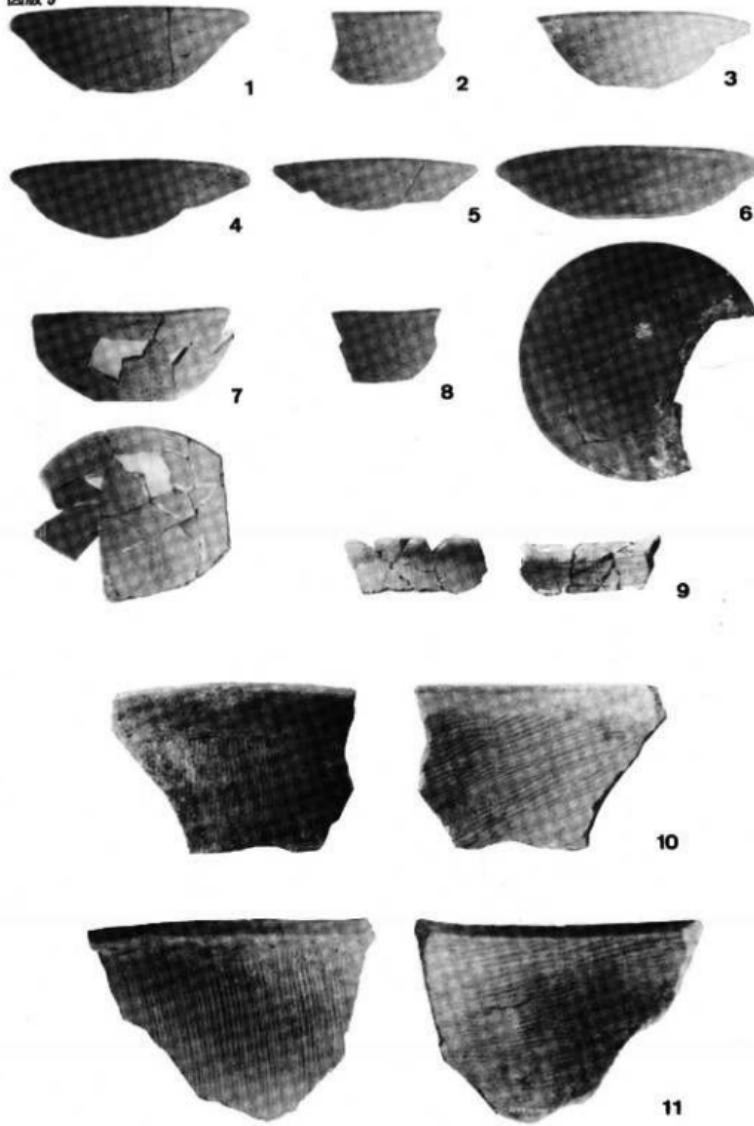


1. 第1号住居址完掘状況

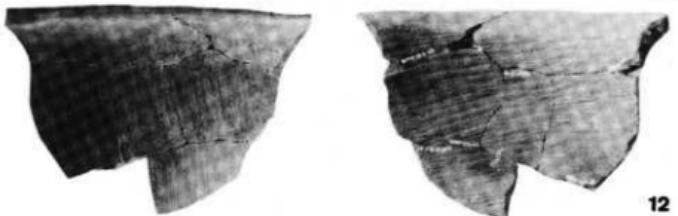


2. 第1号住居址カマド完掘状況

図版9



1. 第1号住居址出土遺物—その1—(1~11)



13

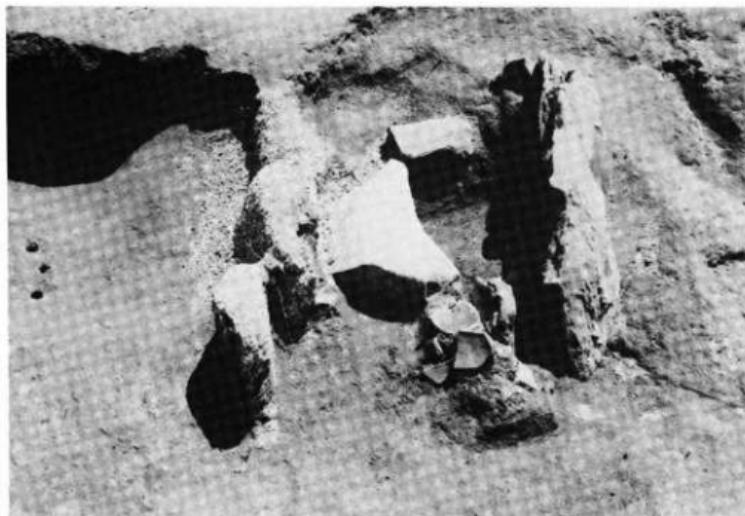
12

14

1. 第 1 号住居址出土遺物—その 2 —(12~14)



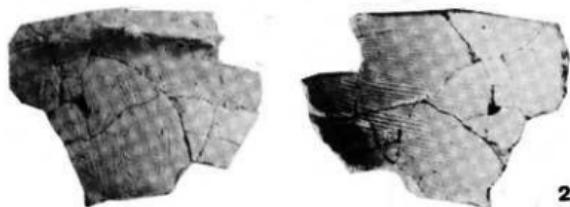
2. 第 2 号住居址完掘状況



1. 第2号住居址カマド完掘状況



1



2

2. 第2号住居址出土遺物（1・2）

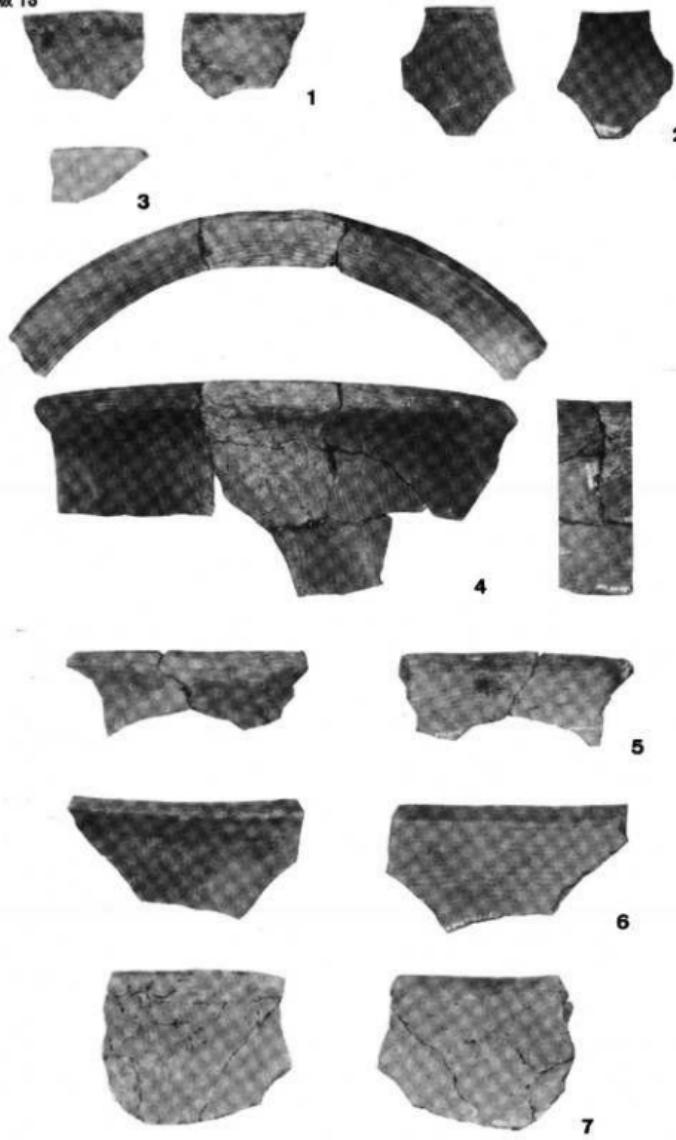


1. 第4-A・B号住居址完掘状況

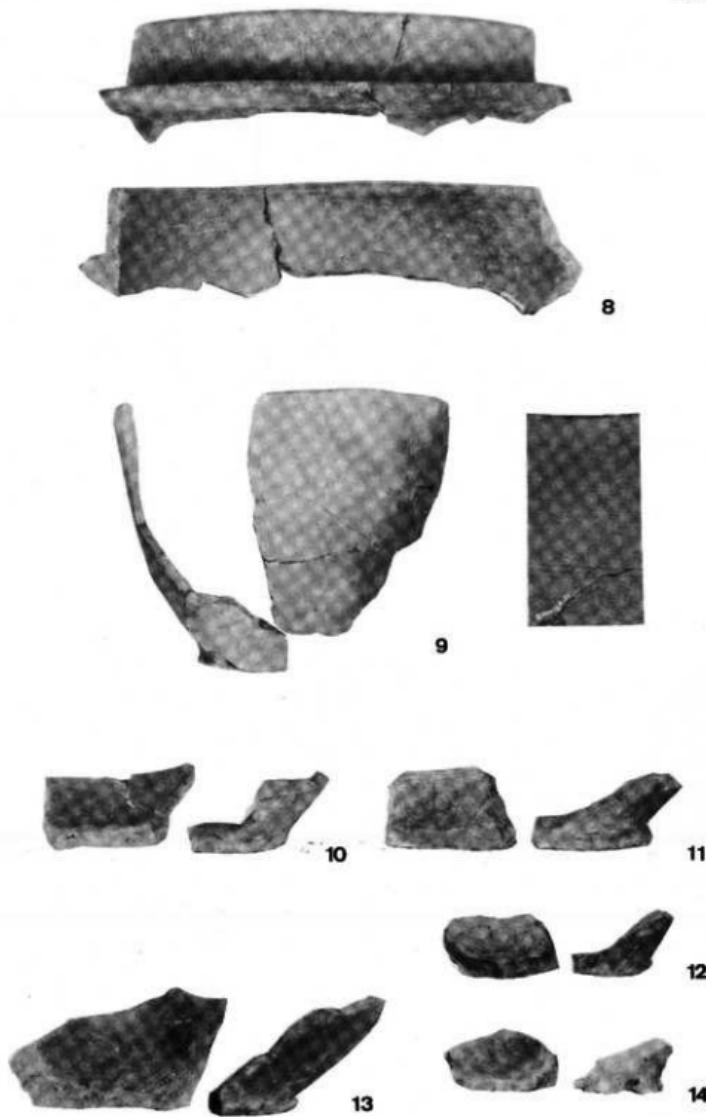


2. 第4-A・B号住居址カマド完掘状況

図版 13



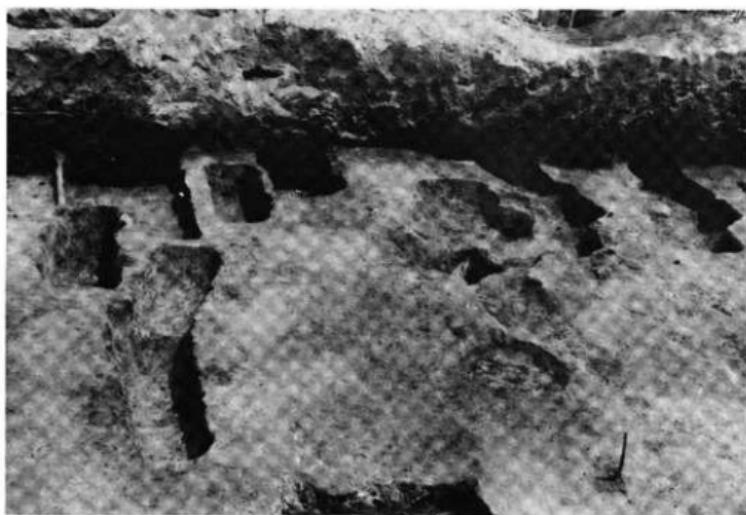
1. 第4-A・B号住居址出土遺物—その1—(1~7)



1. 第4-A・B号住居址出土遺物—その2—(8~14)



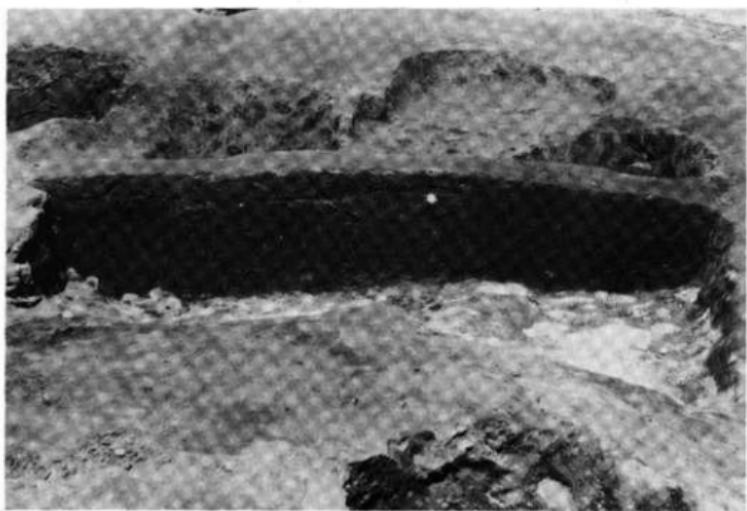
1. 調査地内北西側造構完掘状況



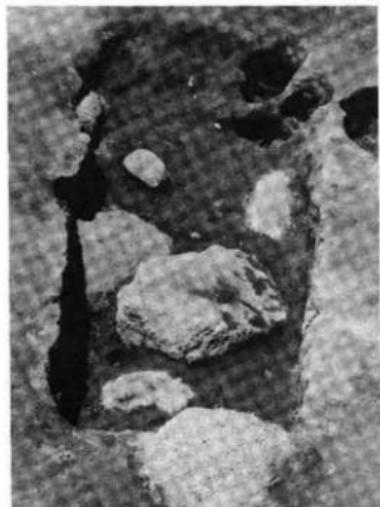
2. 調査地内北東側土塹完掘状況



1. 第 5 • 6 • 7 • 8 • 9 • 10 • 11 • 12 号土壤完掘状况



2. 第 7 • 8 • 9 • 10 • 11 • 12 号土壤土層断面



1. 第1号土壤完掘状况



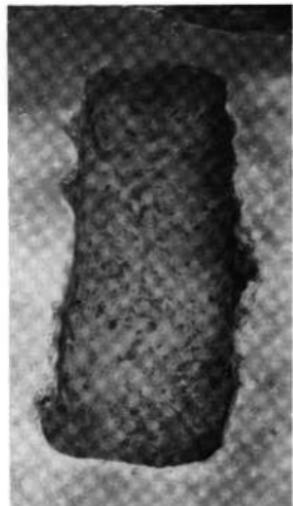
2. 第3号土壤完掘状况



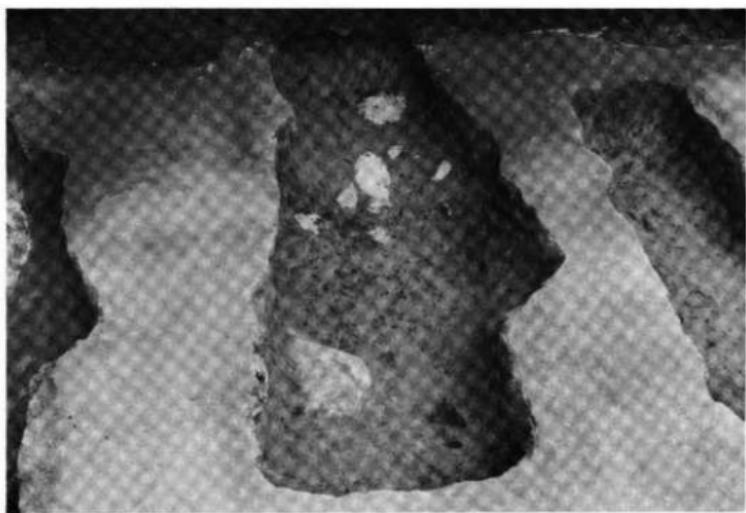
3. 第2·4号土壤完掘状况



1. 第28号土壤完掘状况

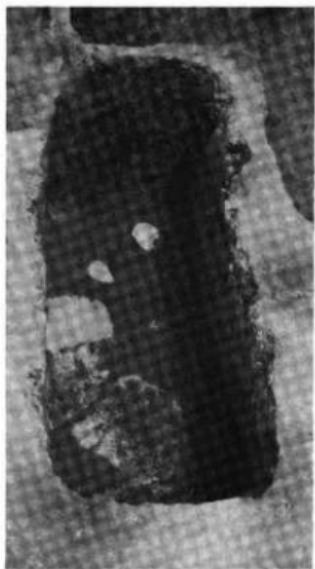


2. 第17号土壤完掘状况



3. 第20+37号土壤完掘状况

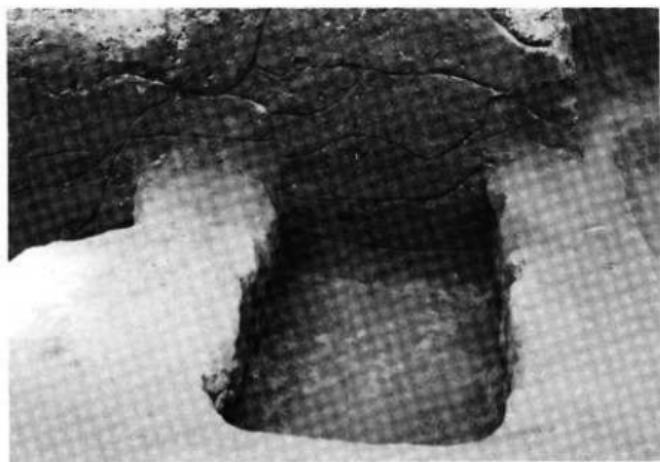
图版 19



1. 第13号土壤完掘状况



2. 第14·15号土壤完掘状况



3. 第17号土壤 土层断面



1. 第24・28・30・34号土壤完掘状況



2. 第13・24・28・30・34・35号土壤完掘状況及び土層断面

圖版 21



1. 第19・21・25・27・38・56号土壤完掘状況



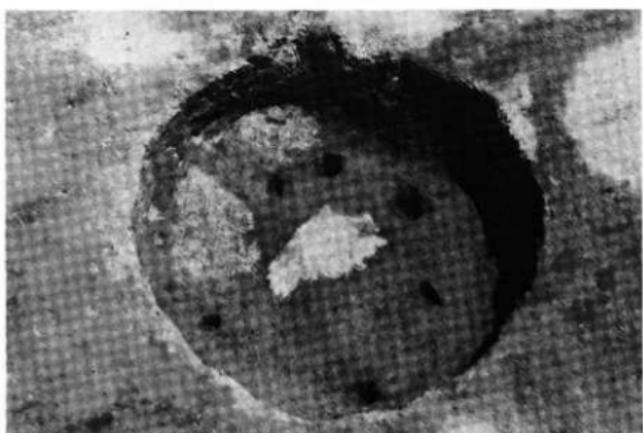
2. 第19・25・27・38・39・56号土壤完掘状況及び土層断面



1. 第3·36·40·57号土壤完掘状况



2. 第52号土壤完掘状况



3. 第51号土壤完掘状况



1. 調査風景 (1)



2. 調査風景 (2)



3. 調査風景 (3)



1. 遺跡見学会風景



2. 村長・教育長
視察風景



3. 調査風景(4)

田野平遺跡

大和村教育委員会

昭和59年3月25日印刷

昭和59年3月31日発行

編集者 竹石健二
野中和夫

発行者 大和村教育委員会
山梨県東山原郡大和村1693-1

発行責任者 竹石健二
野中和夫

印刷者 有限会社文成印刷
林敬二
東京都杉並区方南1-4-1
